遊戯王　5D's　―魔女と魂の願い旅―

赤原猟犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　５Ｄ'ｓ　―魔女と魂の願い旅―

【Ｎコード】
Ｎ５４４９Ｐ

【作者名】
赤原猟犬

【あらすじ】
突如空から降ってきた青年。日森　睦月。
自分を保護してくれた龍亞と龍可、そしてその両親。
しかし睦月は、記憶喪失になっていた。
記憶の無い睦月は両親に何故か好かれ、龍亞達と一緒に住む事になった。
何故自分は空から降ってきたのか？　自分は一体何者なのか？
自らを取り戻す旅が、始まろうとしていた。

第1話「出会い」（前書き）

こんにちは。赤原猟犬です。初めての人は初めまして。既に知っておられる方はお久しぶりです。

色々、言い訳したいと思いますが、あとがきに書いてますのでそれを読んでください。これの前作品を知っていて下さった方には通じると思います。

これが初めてという人は気にしないでください。恐らくこっちの方が大多数だと思いますが……。

それでは、よろしくお願いします。

第1話「出会い」

▲▲▲

「龍可、どうしたの？」
「うん、なんか胸騒ぎがして」
とある雨の夜、私はどうにも落ち着かない気持ちを持て余していた。
私【龍可（ルカ）】は、人と比べると少し特異な能力を持っている。その力が、私に何かを伝えようとしている感じがする。
「ふ～ん、龍可がそんな事言うなんて何かあるのかなぁ」
そう言って窓の外を見る為か、窓際に移動する。
彼は私の双子の兄、【龍亞（ルア）】。少し五月蝿い所があるけど、臆病な私の傍にずっと一緒にいてくれる頼りになる兄だ。
「それにしても結構降るね。最近雨が少なかったからかな？」
「さあ、どうでしょうね」
今はあまり兄の話に付き合う気がしない。私は曖昧な相槌を打っておく。
少し前から起きだした胸騒ぎは徐々に大きくなっていて、今この時も大きく肥大していく感覚がある。
「（あまりいい気がしないなぁ。今日はもう寝ようかしら）」
胸騒ぎが気にはなるが、正直この感覚が私の中を占めている時はあまりいい事は起きない事が多い。起きていても嫌な思いをするだけかもしれないなら、多少早いが寝てしまってもいいだろう。
「龍亞、私もう」
寝るよ。そう続けようとした時、兄は窓の外の空を指さして叫ん

だ。
「龍可、アレ！」
何事かと思って窓際によってみるのと、外で大きい音が鳴るのはほぼ同時だった。

ドブンッッ！

鈍い水没音。外には私達には大き過ぎる程のプールがあった。
何かがプールに落ちたのだろうか？　そう思ってプールに目を移してみるが、外の暗闇であまりよく見えない。
だが、なにかが浮いているのが見えた。
「なんだろアレ」
「人だよ龍可！　空中でライトにあたってその時に見えたんだから間違いないよ！」
「本当に？　見間違いじゃないの？」
「間違いないよ！　俺、傘とってくる！」
そう言って兄は傘のある玄関に走って行った。
ここはホテルの最上階で４８階。龍亞は空を指差してたし、さっきも空中がどうとか言っていた。
人？　それも空から？
ふぅ、とため息を一つ吐く。
あの兄の事だ、助けようと言ってくるに違いない。兄はそういう人だ。
やはり、もっと早めに寝ておくべきだったと、戻ってきた兄から傘を受け取りながら思った。

●●●

「あ、父さん母さん気がついたよ！」
すぐ近くで少年が叫ぶ。
ここはどこだろう。知らない天井、見慣れない風景。どうやらここは室内のようだ。
俺は寝かされていたベッドの上に体を起こす。
起こすのと同時に、緑色の神の少年と茶色いスーツ姿の男性が入ってきた。この部屋の主だろうか。
「どうやら起きたようだね。調子の方はどうかな？」
「……それなりに」
「そうかそれは良かった。取り敢えず、色々聞きたい事があるので名前を教えてもらってもいいかな？」
「名前？」
俺の名前？
「――俺の、名前？」
「もしかして、分からないのかね？」
俺の名前。分からない。思い出せない。
「……君の名前は【日森（ひのもり）　睦月（むつき）】。年齢１６歳。それであっているかね？」
「え？」
「すまないと思ったが、君の荷物を見させてもらった。何かを書き写した紙媒体のノートに、見た事も聞いた事もない学校の紙媒体の生徒手帳。そして財布。ああ、中身を抜いているなんて事はないから安心してほしい。しかし学校はまったく聞き覚えの無い様な学校名。身分証明となるものは無し。取り敢えず生徒手帳から先程の名前と年齢だけを確認しておいたのだが、君の方から聞いておいた方がいいと思ってね。聞いてみたのだが……。もしや記憶喪失か？」
記憶喪失。そうなのだろうか。
そもそも俺は何故ここにいるのだろう。ここで目覚める前の事が思い出せない。

「兄ちゃん、記憶喪失なのか？」
先程の緑色の髪の少年がベッドに近寄ってくる。身長的に、おおよそ１０歳程だろうか。
少年は緑色の髪を後ろに結んで、白を基調とした半袖のジャケットに短パンを着ている。中に黄色の模様が入った青色のシャツを着ているようだ。幾何学な模様のリストバンドも着けている。
その幼い顔には心配そうな表情が浮かんでいる。俺の事を心配してくれているのだろう。
「……どうやらそうらしい」
実際、記憶はこの部屋の事しか持っていないし、思い出せる気配の欠片もない。完全に記憶喪失だろう。
「なら、ここに何故居るのかも分からないだろう。龍亜、説明してあげなさい」
「うん！　んじゃあ説明するよ。俺が雨空を見てたら、空に何かがあったんだ。それに他のビルのライトが当たった時に、それが人だって分かったんだ。兄ちゃんは空から落ちてきたんだよ！」
「空から？」
雨の中で？　空から？　いったい俺に何があったんだろう。
「うん。それで、このホテルのプールに落ちたんだよ。そのお兄ちゃんを、家族皆で助けたんだ」
そしてこの部屋で看病された、か。
「すいません、色々迷惑を掛けたみたいで」
「いや、それよりも君はこれからどうするのかね」
どうするって、どうしようか。
記憶がないので伝手なんてないし、そもそもお金がない。さて、どうしたものか。
「その様子だとどうしようもないようだね」
はい、正にその通りです。
「なら、ここに暫く住んでみたらどうかな？　部屋なら空いている」
「いいんですか？」

「ああ。仕事上、目を見ればその者がどんな人物かは大体分かる。君はどうにも悪い人間ではなさそうだ」
そんな事が出来るなんてどんな仕事をしているんだこの人。政治家か何かか？
まぁ空から降ってきた自分を信頼してくれるなんて俺にとってはありがたい事だけど。
「その代りと言ってはなんだが、私と妻は仕事で忙しくてね。明日にはここを離れなければならないんだ。この子達の面倒を見てあげてはくれないか？」
「えっと、いいんですか？　一応状況的に、俺は結構怪しい人間だと映ると思うんですが」
自分の子供を任せるなんてちょっと度が過ぎていないか？　知り合いなら他にもいるだろう。
子供の世話を見知らぬ、しかも怪しいであろう人物に任せるなんて、俺なら出来ない。
「さすがに全面的ではないが、君の事はそれなりに信頼のおける人物だと私が判断したんだ。私の目はまだ現役だよ。それとも、うちの子達に何かしようというのかね？」
俺は急いで顔を横に振った。何かこの人物から言い知れない雰囲気が俺を押しつぶすほどに溢れている。ヤバい、滅茶苦茶怖い。これが父親の威厳と言うものか。
「妻には私から説明をしておこう。君はもう一人の私の子に挨拶してくるといい」
そう言って父親？　は部屋を出て行った。
「よし、じゃあ龍可に会いに行こう！　ほら起きて！」
「わ、分かったから少し待ってくれ」
「あ、そだ。俺の名前を言ってなかったっけ。俺は龍亞。よろしく」
「ああ。俺は、えっと確か、日森　睦月だ。よろしく」
そういって俺と龍亞は部屋を出た。

●●●

龍亞に連れられて部屋を出て、目的の子供がいるリビングに向かう。

その途中で気付いたが、この家、それなりにでかい。

廊下は広いし、さっきの部屋も寝室にしては結構広かった。ここはもしかしたら小金持ちくらいの家なのかもしれない。父親さんも結構忙しそうだったし。

1、2分歩くと、これまた広いリビングに出た。

真ん中に人一人が余裕で横たわれるソファがあり、奥には横に広い窓、その先にはプールが見える。多分、俺が落ちたプールだろう。

手前の壁際には四つの椅子とテーブル。その先にはキッチンも見える。どうやらここはダイニングとリビングが合体している様だ。その横には2階に繋がる階段もある。

そしてソファには一人の少女が座っていた。

「お～い、龍可。さっきの人連れてきたよ」

「え？」

振り向いた少女は、龍亞とよく似ていた。双子だろうか。年も龍亞と同じぐらいだ。

龍亞と同じ髪の色をしており、横の髪と前髪の挟間辺りを左右で結んでいる。

服装も龍亞と似た服で、違うのはシャツの長さと基本色だけだ。少女のシャツは長袖で、基本色は赤になっている。

「初めまして、龍可です」

「睦月だ。よろしく」

どうやら警戒されてるな。まぁ正当な反応だろう。空から降ってきてるし。

「あのね龍可。睦月は今日から一緒に住む事になったんだよ」

「え！？」
龍亞、その話は少し早すぎるぜ。先に警戒を解いてからの方が話しやすかったのに。
「君のお父さんの計らいでな。これからよろしく」
「え、ええ。でもどうして？　そもそもどうして空から降ってきたの？」
「なぜ落ちてきたかは俺にも分からないんだ。それに俺は今記憶がない。そのおかげ、って言えば多少変だが、この家に住まわせてもらえる様になったんだ」
まさに地獄に仏だ。何が幸いするするか人生分かったもんじゃない。まぁ記憶が戻るに越した事はないんだろうが。
「え、記憶がないの？」
「ああ。落ちた拍子になのか、それとも違う要因なのかは分からないが、俺にはここで目覚める前の事が思い出せない」
「そうなんだ……」
何故か俯く龍可。なにか思うところでもあるのだろうか。

▲▲▲

昨日降ってきた人が、私の前にやってきた。
透き通った水色の目に、黒色のシャギーローレイヤーの髪の毛。お父さんの部屋着を着ていて、とても大きいお兄さんだった。
私は体に力が入るのを感じる。私はあまり知らない人と話すのが得意じゃない。龍亞は全然問題にしてないけど、私は少し怖い。そのせいで警戒してしまう。
「初めまして、龍可です」
「睦月だ。よろしく」
睦月と名乗った人は、少し表情を崩した。私が警戒してる事に気

付いて困っているような表情だ。
ごめんなさいと言いたいけれど、それさえも億劫になってる私がいた。
「あのね龍可。睦月は今日から一緒に住む事になったんだよ」
「え！？」
知らない人がこの家で？　私は驚愕の声をあげてしまった。彼も少し慌てているようだ。
そんな事を決めるのはお父さんだと思う。という事は、お父さんが認めたって事になる。
それ程悪くない人なのかな？　でも空から降ってきた人だし、警戒してもいいと思うんだけど。
「君の父さんの計らいでな。これからよろしく」
「え、ええ。でもどうして？　そもそもどうして空から降ってきたの？」
「なぜ落ちてきたかは俺にも分からないんだ。それに俺は今記憶がない。そのおかげ、って言えば多少変だが、この家に住まわせてもらえる様になったんだ」
「え、記憶がないの？」
「ああ。落ちた拍子になのか、それとも違う要因なのかは分からないが、俺にはここで目覚める前の事が思い出せない」
嘘をついているようには見えない。この人は本当に記憶喪失なんだ。
そんな人を、私は疑っていたんだ。
「そうなんだ……」
その後、私はいつの間にか彼に対する警戒を解いていた。

●●●

「あら、あなたが日森　睦月さんねぇ？」
「はい。初めまして。母親さん」
龍可が俯いてしまったのでどうしようかと悩んでいると、俺と龍亞が来た扉からさっきの父親さんが母親らしき人を連れてやってきた。
「はいこれ。あなたの服とカバンね。中に色々入っていたわよぉ」
「ありがとうございます」
おっとりと間延びしたしゃべり方の母親さん。龍亞と龍可と同じく緑色の髪の毛を、腰までストレートに伸ばしている。二人の髪の色はこの人からの遺伝のようだ。
カバン（生徒カバンと言うらしい）の中を見てみると、先程父親さんが言っていたノートと、生徒手帳と、何かの白い箱があった。
「ああ、それねぇ。何かが引っ掛かっているのかしら、開かないのよぉ」
「開かない？」
一見何の変哲もない長方形の箱だけど。母親さんが言うように何かが引っ掛かっているのだろうか。
「睦月、開けてみなよ！」
龍亞の言う通り、試しに開けてみることにした。
「って、結構簡単に開きましたけど？」
「あらぁ？　不思議ねぇ、お父さんでも開かなかったのに」
「睦月、そんなのいいから中身はなんだったの？」
龍可すごく急かしてくる。こういうところは子供らしいな。
中身を取り出してみる。
「なんだこれ？　餞別？」
中には紙が一枚入っていた。それには「選別よ。受け取っておきなさい。きっと必要になるから」と書いてあった。誰かからのメッセージだろうか。だれかは分からないけど。
中にはもう一つ何かあった。きっとこれが餞別と言われている物だろう。

取り出してみる。それは。
「ストラクチャーデッキ？」
それは、絵柄の入ったカードの束を収納した箱だった。

第1話「出会い」（後書き）

すいません。
開口一番で謝っておきます。
内容がかなり変わっていると思います。原作さえ変わってる始末です。
えっと、一応言い訳をさせていただきますと、ゴッドイーターの話を書くにはモチベーションが落ちてしまいました。ですので、現在観ている遊戯王５Ｄ'ｓの話に変える事にしました。
すいません、かなり自分本位なのは理解しています。
こんな作者ですいません。もし、まだ見放さないでいて下さるのなら、この話も読んでください。

ここまで読んでくださって、ありがとうございました。
それでは。

第2話「決闘―デュエル―」

●●●

「お～い龍亞。朝だぞ。起きろ～」
「う～ん、後5分だけ寝かせてよ～」
寝ぼけ声でそう呟き、寝返りでこちらから体を逸らす目の前の少年。龍亞（ルア）。
白いパジャマにとんがり帽子のナイトキャップを被り、いつもの寝相の悪さで布団を蹴飛ばして、こちらに背を向けて丸くなっている。
5分という辺りや容姿が10歳という歳に寸分違わぬ姿に思わず微笑んでしまいそうになる。
「そんな代表的な決まり文句を言っている暇があるなら起きろ。今日も龍可（ルカ）を待たせるつもりか？」
「うぅ～～」
龍亞が唸りはじめた。きっと今彼の中では罪悪感と誘惑の間で揺れているに違いない。
しかしこちらとしても待ち人がいるのだ。悪いがそんな事は知った事ではない。
のでもう強制的に起こす事にする。ああ、いつも通りな朝だな。と一応呟いておく。
「――右手にお玉を！　左手にフライパンを！　横たわりし者に正義の鉄槌を！　唸れ！　死者の目覚め！」
お玉とフライパンを思いっきりぶつけ合う。

ガン！　ガン！　ガン！　ガン！

「うわぁぁぁあ！　五月蝿ーーい！！」

「起きたか」

耳栓を外す。【死者の目覚め】をする時は絶対にこれをつけてないと対象を起こす前に自爆してしまう。

だったら違う方法で起こせよ。と言われたが、何故だかこれが一番しっくりきたので結局続けている。

「ううぅ。おはよう睦月（ムツキ）兄ちゃん」

「いつも言っているが、これをやられる前に起きろ」

「俺的にはもうちょっと優しい方法で起こしても罰は当たらないと思うんだけど……」

知るか。起きない方が悪い。地獄の沙汰と起きない奴の起こし方は俺次第だ。

「じゃあ早く着替えて降りて来い。朝ご飯が冷めてしまうぞ」

「わかってるよ、もう。あ～まだ頭が揺れてる感じがする」

この家の始まりは、いつもこの朝から始まる。

●●●

龍亞の部屋を出て近くの階段を降りる。

階段の位置はリビングとダイニングを繋げた部屋であるこの空間の端に備え付けられており、朝ご飯はここで食べる。テーブルには既に少女の姿があった。

「龍亞はもう少しで降りてくる。後少し待ってくれ」

「分かったわ。それにしても、そろそろ一人で起きれないのかしら、龍亞は」

はぁ、と1つため息をつく少女、龍可。

先程の少年、龍亞の双子の妹であり、妹である龍可の方がしっかりしている。あの兄あっての妹なのか、この妹あっての兄なのか。
龍可は既にパジャマから部屋着に着替えを済まし、テーブルで家族が集まるのを待っている。この家では食事は絶対に全員そろってからと決まっているからだ。
龍可はいつも自分で起きて朝の用意を済まし、こうして大体いつもと同じ時間に座っている。二人の世話を任されている俺としては龍可に言う事はあまりないのでいつも感心していたりする。１０歳なのにここまでちゃんと出来ているのなら十分過ぎるだろう。
反面、兄の龍亞はある意味で１０歳の子供らしい。まぁ龍可が少し大人らしいだけだろう。
そんな事を考えていると着替えを済ませた龍亞が眠気眼をこすりながら階段を降りてくる。先程の大音量でも流石に完璧に眠気を取る事は出来ないようだ。まぁ無理矢理起こしたのだから無理もないだろうが。
「遅いよ、龍亞」
「龍亞、先に顔を洗ってこい。俺達はもう少し待っているから」
「はぁい」
そのまま洗面所に向かう龍亞。いつもは元気一杯な子供だが、朝は静かな子だよまったく。
「さて。龍可、飲み物は何がいい？」
「私はいつものミルクでお願いするわ」
「分かった。龍亞も同じでいいか」
俺も一緒にして、飲み物を統一する事にしよう。別に大した意味はないが、手間は省ける。
俺はテーブルから離れ、キッチンの冷蔵庫を開ける。中から数日前に近くのスーパーで購入したクリボー印のミルクを手に取り、３つのコップに注いでテーブルに運ぶ。
ほぼ同時に龍亞も洗面所からテーブルにやってきた。これで現在この家に住んでいる人物の全員が揃った事になる。

龍亞と龍可の両親は仕事で殆ど家にいない。なので俺がここに来た時から俺は二人の世話係になった。
「「「いただきます」」」
手を合わせて食事の挨拶を行い、朝食を食べる。今日のメニューは焼いた食パンにハムとスクランブルエッグ、オレンジゼリーだ。ゼリーの製造会社はクリボー印。食品を中心に幅広くカバーしている製造会社だ。
閑話休題。
俺はとある雨の日に空からこのペントハウスに落ちてきたらしい。その際のせいかどうかは分からないが、俺は記憶喪失だった。
そこで、この2人の父親さんが俺の事をここで住まわせてくれる様になった。理由は「目を見て悪人ではないと思ったから」らしい。父親さんは仕事上、眼力に自信があるようだ。
初めは龍可には警戒されていたが、それも無くなった。龍亞は最初からそこそこ懐いていたがそこは性格の違いだろう。
ちなみに俺の戸籍は記憶が戻るまでこの二人の義兄となっている。父親さんが知り合いの伝手で作ってくれたのだ。その際に楽だったのが養子と言う形だったらしい。まぁ記憶が戻るまでだし、居候の身分で口を出すわけにはいかないので二つ返事で了承した。別段、大きな不満も無かったからな。
「龍亞、ちゃんと皿の上で食べろ。パン屑が落ちるぞ」
「分かってるよ。それより睦月兄ちゃん、後で決闘しようぜ！」
「分かった。龍亞の課題が終わってからだがな」
「うげっ、後でちゃんとやるからさー、ね？　ね？」
「駄目だ」
龍亞の甘えを一蹴する。
この二人は学校に通っている訳ではなく、いわゆる通信教育で勉強している。
龍可があまり友好的な性格じゃない上に、昔大きい病気を起こして今も稀に体調を崩すので、両親の仕事がある程度安定するまで通

学を見合わせているそうだ。
一応、学校には入学しているらしい。
多少の後遺症が残ったが害はなく、薬を服用している訳でもないので敢えて聞いていない。
「そうよ龍亞。いっつもそうやって嫌な事を後にして、結局やらないんだから」
「うぅ、龍可まで〜。分かったよぅ、でも約束だからな！　ちゃんと後で決闘してよね！」
「分かっている」
さて、龍亞が課題を終わらせるのは恐らく昼ぐらいだろう。龍可の力を借りて。
それまでにやる事はやっておこう。とはいえ、やる事は然程多くはないが。
そう考えながらおいしいミルクを飲み干した。

●●●

カードゲームにデュエルモンスターズ（今後ＤＭ）という物が存在する。
それは全国で爆発的に人気を保っている超有名なカードゲームだ。
そのカードゲーム、ＤＭをやる人物を決闘者（デュエリスト）と言う。
そしてその決闘者の約８、９割の人は、決闘者としての誇りを持っている。
何かを競う時、何かを求める時、そういった事を決めるのは大抵このＤＭでの勝ち負けだ。
治安維持局のセキュリティ警察が決闘犯罪者などを取り締まる際にもこのＤＭが使われるなど、唯の遊戯に留まらず社会現象として成り立っていると言っても過言ではない。

カードは、モンスター・魔法・罠の三種類があり、それを４０～６０枚までのデッキを数千とあるカードの中から作る。
戦術性に富み、１人１人デッキの内容が違えば、プレイングも違う。
決闘者の腕、デッキ構築の良し悪し、そして相性と運。それらが深く関わって、無限の可能性を孕んだゲームとなっている。
娯楽程度に嗜む程度であれば然程難しくはないが、上を目指す決闘者は常にＤＭの事を考え、鍛錬を繰り返している。それほどまでに熱くなれる要素を持ったカードゲームなのだ。
そうなるとルールもそれ相応に事細かく、尚且つ厳しくなる。ルールを覚えるのも一苦労。
ＤＭ決闘者専用の学校、デュエルアカデミアというものも存在するらしい。龍亞も龍可もそこに編入予定だと両親に聞いた。
俺はこのＤＭを始めて約半年。ようやくルールを暗記し、デッキ構築やプレイングと言ったところを勉強している。

●●●（遊戯王デュエルモンスターズのルールは公式サイト、又は遊戯王ｗｉｋｉを参照して下さい）

「さぁ、準備はいい？」
一定の距離を置き、龍可とペントハウスの庭で向き合う。
２人の左腕にはＤ－ディスク（デュエルディスク）と呼ばれる物が装着されている。
これはＤＭのゲームを行う上で重要な機械だ。フィールドの役目を果たす。
更にはソリッド・ビジョン機能を持っており、カードの立体映像化をしてくれる。迫力があって結構凄い。
形は前腕を大きく覆う少し伸びた円盤に、３つのカード枠を象った板が横に付いている。板の端にはその円盤と同じ色の枠がある。

そしてＤ－ディスクを起動すると、内蔵された板が伸びて合計５つのカード枠を収める板になる。
円盤にデッキを嵌めて、これで準備が完了する。
「それじゃあ龍可先生。よろしく頼む。龍亜に勝つ為にはもう少しなんだ」
この後昼食を終えた後、龍亞との決闘の約束がある。だから今の内に練習を龍可に頼んでいる。
ちなみに龍可は天才デュエルっ娘と言われる程、将来有望な決闘者だ。
龍亞はともかく、俺には手も及ばない。
「うん分かった。じゃあ先攻は譲るね」
「済まない。胸を借りる。それじゃあ行くぞ」
「「決闘（デュエル）！」」

第2話「決闘―デュエル―」（後書き）

こんにちは。谷川です。

決闘と言いながら決闘は次の話です。本来ならこの話で書く予定だったのですが、不手際で消えてしまいました。最高潮の場面で消えました。悔やんでも悔やみきれません。

でも、これに負けずに頑張って書き直したいと思います。なるべく早くには投稿しますので。

それでは。

第3話「VS龍可」（前書き）

この小説初めての「決闘」に大分苦労しました。
出来れば思った事を感想に書いて送って下さるとありがたいです。
何分、決闘風景は初めてですので。

７／１１　【マジカル・コンダクター】効果に手違いがありましたので、修正しておきました。すいません。

７／１２　機甲竜騎兵様のご指摘で、【古の森】の後に【マジカル・コンダクター】に魔力カウンターを乗せ忘れていたのを修正しました。その後の展開も修正に合わせております。すいませんでした。

第3話「VS龍可」

●●●

「「決闘―デュエル―！」」

睦月LP（ライフポイント）4000

龍可LP4000

「俺のターン、ドロー。俺は手札から、【憑依装着―ウィン】を召喚」

憑依装着―ウィン　風　☆4　魔法使い族

攻撃力1850／守備力1500

「先攻の俺は攻撃できない。3枚伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。手札から、【黄金の天道虫（ゴールデン・レディバグ）】をこのターンのエンドフェイズまで睦月に見せる。この効果で、私はLPを500回復する」

龍可LP4000→4500

「さらに手札から、【古の森】発動。ここで争う事は許されない」

龍可のD―ディスクの板の端が伸びる。これはフィールドカードをセットするフィールドゾーンだ。

そして周りの風景がソリッド・ビジョンによって森に代わる。陽が木々の隙間から射して少し神秘的だ。

「さらに魔法発動、【平和の使者】」
【平和の使者】は、攻撃力１５００以上のモンスターの攻撃宣言を行わせない攻撃制限のロックカード。現状のモンスターは１５００を超えるモンスターが多い。特にアタッカー・準アタッカーには天敵の様なカードだ。なので。
「この瞬間、カウンター罠（トラップ）発動。【魔宮の賄賂】」
このカードは相手の魔法・罠を無効化して破壊するカード。相手にドローさせてしまうが、それに目を瞑れば有能なカードだ。
「【魔宮の賄賂】のカード効果によって一枚ドロー。そして手札から、【光の護封剣】を発動」
俺と龍可の間に光の剣が３本突き立てられる。
このカードは次の自分のスタンバイフェイズに１本ずつ消えていき、その剣が１本でも存在していれば俺は攻撃が出来ないカード。
つまりは俺は３ターンの間攻撃を封じられたという事だ。
「私はここで、【黒魔導士クラン】を召喚」

黒魔導士クラン　闇　☆２　魔法使い族
攻１２００／守０

「これで私はターンエンド。エンドフェイズ時に、手札に【黄金の天道虫】の表示は裏側に戻るわ」
「俺のターン。ドロー」
「ここでクランの効果発動。相手のモンスター×３００のダメージを相手に与えるわ」
俺のモンスターはウィンのみ。よってダメージは３００か。

睦月ＬＰ４０００→３７００

「今は何も出来ない。ターンエンドだ」
「睦月のエンドフェイズ、護封剣の１本目が消滅して、残りあと２

本」
右の光の剣が粉々に砕け散る。
「私のターン。ドロー。手札から【黄金の天道虫】をさっき引いた【黄金の天道虫】と合わせて二枚、相手に見せる。そして私は１００ＬＰを回復する」

龍可ＬＰ４５００→５５００

「私は手札から、【Ｎ・エア・ハミングバード】を召喚」

Ｎ・エア・ハミングバード　風　☆３　鳥獣族
攻８００／守６００

「そしてハミングバードの効果発動。相手の手札１枚×５００ＬＰ回復するわ」
「俺の手札は３枚。合計１５００ＬＰ回復か」

龍可ＬＰ５５００→７０００

これが龍可のデッキ。
相手の攻撃を封じ、自分は１ターンずつＬＰを回復し、さらにじわじわと相手にダメージを与える。
かなりの長期戦を考慮し、ゆっくりと確実に勝ちにいくデッキだ。
正直、俺が龍可に１勝も出来ない理由はここにある。
龍可のロックカードが多過ぎるのだ。破壊しても次のロックカードがやってくる。
来なくても龍可は常に回復していくので、次のロックカードが来るまでにＬＰを削りきれない。
こちらは回復する手立てがないので、ダメージは募るばかり。
腕の差や相性が悪すぎる。龍可が攻撃してこないのはまだ手を抜

いているからだろう。
「相も変わらず、フラストレーションの溜まるデッキだ」
「これが私のデッキ。あまりカード達を傷つけたくないの」
「絶対攻略してみせる」
「望むところよ」
さてそれにはどうするか。考えなくちゃな。
「私はここでターンエンド。エンドフェイズに【黄金の天道虫】は裏側に戻るわ」
「俺のターン。ドロー。クランのダメージを受ける」

ＬＰ３７００→３４００

「くそ、まだ来ない。ターンエンドだ」
俺の手には逆転への一手が来ない。
早く引かなければ、また俺は何も出来ずに負けてしまう。
「そしてまた護封剣が１本消滅する」
今度は左の剣が砕け散る。残りあと１本。すなわちあと１ターン。
「私のターン、ドロー。そして【黄金の天道虫】の効果発動。１００ＬＰ回復するわ」

龍可ＬＰ７０００→８０００

「さらに私はハミングバードの効果発動。睦月の手札４枚×５００ＬＰ回復する。

龍可ＬＰ８０００→１００００

「ついに１万を超えたか。元のＬＰの２．５倍か」
「まだまだ。１枚伏せてターンをエンド。【黄金の天道虫】は元に戻すね」

「俺のターン、ドロー。来たっ！」
「この時、クランの効果でダメージを受けてもらうわ」
「いや、それにチェーンで手札から【ディメンション・マジック】を発動！」
「なら私はさらにチェーン、【神の警告】を発動。これは、２０００ＬＰを払って、モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚、又はモンスターを特殊召喚する効果を含む魔法・罠を無効化にし、破壊する！」
「うっ、くそ！」
俺の【ディメンション・マジック】は光の欠片になって散っていった。

龍可ＬＰ１００００→８０００

「カードを無効化したので、クランのダメージは受けてもらうわ」

睦月ＬＰ３４００→３１００

「……ターンエンドだ」
「神警はやり過ぎだったかな？」
「……そんな事はない」
「そ、そう？」
そして俺がターンエンドした事によって最後の護封剣が破壊され、【光の護封剣】は効力を失って破壊される。
最後の護封剣も砕け散った。
だがまたロックカードが来れば、もう夢も希望もない。
その時はもう降参（サレンダー）しよう。
「私は手札から【黄金の天道虫】を２枚見せて１０００ＬＰと、ハミングバードの効果で２０００ＬＰ回復するわ」

龍可ＬＰ８０００→１１０００

「そしてターンエンド」

「はぁ、よし。何とかしないとな。俺のターン、ドロー。例に漏れず、クランのダメージを受ける」

睦月ＬＰ３１００→２８００

「俺は手札から、【憑依装着―ヒータ】を召喚」

憑依装着―ヒータ　炎　☆４　魔法使い族

攻撃力１８５０／守備力１５００

「ようやく攻撃できる、行くぞ！　ヒータでクランに攻撃。そして罠発動！　【マジシャンズ・サークル】！　このカードは魔法使い族モンスターの攻撃宣言時にのみ発動できる。お互いはデッキから、攻撃力２０００以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する。俺が選ぶのは、【憑依装着―アウス】！」

憑依装着―アウス　地　☆４　魔法使い族

攻撃力１８５０／守備力１５００

「私はデッキから【白魔導士ピケル】を特殊召喚するわ」

白魔導士ピケル　光　☆２　魔法使い族

攻１２００／守０

「そしてヒータとクランのバトルに入る。やれ、ヒータ！」

「うっ！」

憑依装着―ヒータ　攻１８５０　１２００攻　黒魔導士クラン
龍可ＬＰ１１０００→１０３５０

クランはヒータの攻撃により、光の欠片になって砕け散る。戦闘破壊だ。
「ここでフィールド魔法【古の森】の効果を発動！　攻撃を行ったモンスターは戦闘後に破壊される！」
「しまった、攻撃チャンスが今まで無かったから忘れていた！」
クランの後を追う様にヒータも破壊される。
「だがここで攻めなければいつ攻める、ウィン！　臆せずハミングバードにアタックだ！」
「うぅっ！」

憑依装着―ウィン　攻１８５０　８００攻　Ｎ・エア・ハミングバード
龍可ＬＰ１０３５０→９３００

そしてハミングバードは戦闘破壊、ウィンは【古の森】の効果破壊で両者のモンスターは消えていった。
「そしてアウス、ピケルにアタック！」

憑依装着―アウス　攻１８５０　１２００攻　白魔導士ピケル
龍可ＬＰ９３００→８６５０

そしてやはりどちらも光の欠片になって散っていく。
「ターンエンドだ」
「く、私のターン。ドロー！　手札から【黄金の天道虫】を見せて１０００ＬＰ回復！」

龍可ＬＰ８６５０→９６５０

「私は、手札から【白魔導士ピケル】を召喚。１枚伏せてターンエンド」
「俺のターン、ドロー。俺は手札から【憑依装着―エリア】を召喚」
憑依装着―エリア　水　☆４　魔法使い族
攻撃力１８５０／守備力１５００
「ピケルにアタック！」
憑依装着―エリア　攻１８５０　１２００攻　白魔導士ピケル
龍可ＬＰ９６５０→９０００
そしてまた両方破壊。
「ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー。【黄金の天道虫】を見せて１０００ＬＰ回復するわ」
「くそっ、これじゃあイタチごっこだ」
龍可ＬＰ９０００→１００００
「１枚伏せてターンエンド」
「モンスターが無しでターンエンド？　あの伏せカード、またロックカードか？　それともブラフか？」
龍可の伏せカードは２枚、以前に伏せたカードは攻撃反応型でもロックでもないと予想する。先程の攻撃に反応しなかったからだ。
「まぁいい。俺のターン、ドロー。よし、あと一枚。俺は手札から【憑依装着―エリア】を召喚。龍可にダイレクトアタックだ！」
「罠発動！」
やはり来たか！

「【グラヴィティバインド―超重力の網―】、このカードの効果によって☆４以上のモンスターは攻撃できない！」
「ちっ、１枚伏せてターンエンドだ」
長い決闘だ、こっちはもう疲れてきた。
龍可の方は涼しい顔をしている。長期戦の決闘に慣れてるのだろう。
「私のターン、ドロー。【黄金の天道虫】の効果によって１０００ＬＰ回復……ターンエンド」

龍可ＬＰ１００００→１１０００

グラヴィティバインドを張った後もモンスターを召喚しないところをみると、どうやらモンスターが来ないみたいだな。
一応チャンスなんだが、【古の森】とグラヴィティバインドによって手出しが出来ない。厄介だな。
せめてグラヴィティバインドさえ破壊できたら、攻撃できるのに。
「俺のターン、ドロー」
来たカードは、【万能地雷グレイモヤ】。
このカードか。本来なら相手の攻撃時に相手モンスターを破壊できる頼もしいカードだが、今来ても何の役にも立たない。向こうは攻撃をしないのだから。
――まぁブラフにはなる。無いと思うが、一応攻撃反応カードだから伏せておいて問題ないだろう。恐らく。
「俺は手札から1枚伏せて、【マジカル・コンダクター】を召喚」

マジカル・コンダクター　地　☆４　魔法使い族
攻１７００／守１４００

「ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー。私は【黄金の天道虫】の効果で１０００Ｌ

Ｐ回復。そして【サニー・ピクシー】を守備表示で召喚」

龍可ＬＰ１１０００→１２０００

サニー・ピクシー　光　☆１　魔法使い族
攻３００／守４００

「ターンエンド」
「ふぅ。俺のターン、ドロー」
一つ息をつく、本当に疲れてきた。
「ん？　よし来た！　俺は手札から【憑依装着―ウィン】を召喚。そして、手札から【サイクロン】発動！　俺が破壊するのは、グラヴィティバインド！」
竜巻がカードを破壊し、超重力を形成していた球状の網は無くなった。
「これで攻撃が再度可能になった。そして【マジカル・コンダクター】の効果発動、自分又は相手が魔法を発動したとき、このモンスターに魔力カウンターを２つ乗せる。そしてウィンで【サニー・ピクシー】を攻撃！」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×２

憑依装着―ウィン　攻　１８５０　４００　守　サニー・ピクシー

「くっ、だけど【サニー・ピクシー】は守備表示。ダメージは受けないわ。さらに、ウィンは【古の森】の効果をで戦闘後、破壊される」
結果両方のモンスターは破壊される。
「だがそれが俺の狙い目だ」
「えっ？」

「【憑依装着―エリア】で龍可にダイレクトアタック！」
「きゃあ！」

龍可　ＬＰ１２０００→１０１５０

初めて龍可にダイレクトが決まった。でも、結局【黄金の天道虫】の効果で回復するから、実質１０００にも満たないダメージなんだよな。
「今はまだこのカードを発動しない。ターンエンドだ」
「――私のターン、ドロー。例によって【黄金の天道虫】の効果で１０００ＬＰ回復、私は手札から、【踊る妖精（ダンシングフェアリー）】を召喚。【マジカル・コンダクター】に攻撃」

踊る妖精　風　☆４　天使族
攻１７００／守１０００

龍可ＬＰ１０１５０→１１１５０

「【マジカル・コンダクター】を危険視する読みはいいが、勘が甘い！　罠発動！　使う事はないと思っていた【万能地雷グレイモヤ】だ！」
【踊る妖精】は【マジカル・コンダクター】に向かって飛んできたが、すぐ下に現れた地雷の爆発に巻き込まれ、破壊された。
「そんな！」
「いやまさか使う事になるとはな。伏せておいて正解だった」
「……【黄金の天道虫】の表示を戻してターンエンド」
「俺のターン、ドロー。よし、やっと来た！　俺は伏せているカード、【ゴブリンのやりくり上手】を発動！」
「手札交換、手札増強のカードね」
「ああ、止めるか？」

「ううん、いいわ」
「なら俺がチェーンを組む。さらに発動【ゴブリンのやりくり上手】！　そして手札から、【非常食】を発動！」
このカードは自分フィールドの魔法・罠カードを好きな枚数墓地へ送って、その枚数×１０００ＬＰ回復するカード。
だけどその効果は今は重要じゃない。
このカードの使用の目的は別にある。
「俺はこのカードで発動した【ゴブリンのやりくり上手】を２枚とも墓地に送る。そしてＬＰを２０００回復する」

睦月ＬＰ２８００→４８００

「そんな、せっかく削ったのに！」
「だが本命はこれからだ。このカードの処理が終わり、次は【ゴブリンのやりくり上手】の効果処理に入る。このカードは自分の墓地に存在する【ゴブリンのやりくり上手】の枚数＋1枚を手札に加え、一枚をデッキの一番下に戻す。先程俺は【非常食】の効果によって【ゴブリンのやりくり上手】を２枚墓地に送っている。故に３枚ドローして、１枚戻す。俺はこのカードを２枚発動したので、この処理を２回行う」
結局、俺は４枚のドローに成功した訳だ。
これが「やりくりターボ」と言われるドローコンボ。手札を稼ぎ、手札の質をかなり良くする。
初めて出来た。かなりの爽快感だ。
「そして魔法を発動した事により、【マジカル・コンダクター】に魔力カウンターを２つ乗せる」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×４

「まだ俺は魔法を発動する。【貪欲な壺】発動。このカードは墓地

に存在するモンスターを5枚戻し、デッキから2枚ドローする。俺が戻すのは憑依装着のエリア、アウス、ヒータ、ウィン×2の5枚だ」

宣言したカードを墓地からデッキに戻す。

するとD－ディスクがデッキを自動的にシャッフルしてくれる。いつみても早い。人間では出来ない早さのシャッフルだ。いやもしかしたら出来るかも知れないが、俺は絶対出来ない。この機能便利だな。

「そして2枚ドロー」

これで俺はこのターン、6枚ものカードをドローした事になる。

「そして【マジカル・コンダクター】にカウンターを2つ乗せる」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×6

「【マジカル・コンダクター】の効果発動。カウンターを任意の数取り除き、その数と同じ☆（レベル）のモンスター手札又は墓地から特殊召喚する。俺は墓地から【憑依装着―エリア】を特殊召喚。そして手札から、【ダーク・リゾネーター】を召喚」

ダーク・リゾネーター　闇　☆3　悪魔族・チューナー
攻1300／守300

「☆4の【憑依装着―エリア】に☆3の【ダーク・リゾネーター】をチューニング！」

立体映像化された【ダーク・リゾネーター】は3つの光の玉になり、そして同数の緑色をした円環に変わる。

その円環は【憑依装着―エリア】に降り注ぎ、通り抜ける【憑依装着―エリア】はオレンジ色の型枠になる。

「神秘なる力よりいでし魔術師よ、今ここにその全てを示せ！　シンクロ召喚！　現れろ、【アーカナイト・マジシャン】！」

アーカナイト・マジシャン　光　☆7　魔法使い族・シンクロ
攻４００／守１８００

「【アーカナイト・マジシャン】はシンクロ召喚に成功した時、魔力カウンターを２つ乗せる。そしてカウンター１つにつき攻撃力を１０００アップする。だが【アーカナイト・マジシャン】には自分フィールド上の魔力カウンターを任意の数取り除いて相手のカードを破壊できる効果がある。俺は【マジカル・コンダクター】の魔力カウンターを２つ取り除き、龍可の【古の森】とその謎の伏せカードを破壊する」

アーカナイト・マジシャン　攻４００→２４００

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×０

立体映像化された【古の森】と伏せカードを【アーカナイト・マジシャン】の杖から出た光によって破壊される。
それと同時に森の風景が元のペントハウスの庭に戻る。
「伏せカードはなんだったんだ？」
「【ガリトラップ―ピクシーの輪―】よ」
「使えなかったのか？」
「睦月にモンスターを破壊されてから来ちゃったから」
成程、腐っていたのか。
兎に角、これで龍可の場はガラ空き。
さぁ、反撃と行こうか。
「【アーカナイト・マジシャン】でダイレクトアタック。【神秘魔導（アーカナイト・マジック）】！」
「きゃぁあ！」

龍可ＬＰ１１１５０→８７５０

「さらに【マジカル・コンダクター】で攻撃！」

「うううぅ！」

龍可ＬＰ８７５０→７０５０

「１枚伏せてターンエンドだ。【やりくりターボ】も決まった事だ、勝たせてもらうぞ」

「くっ、私のターン。ドロー。【黄金の天道虫】の効果で１０００ＬＰ回復、手札からハミングバードを守備表示で召喚するわ。そしてハミングバードの効果発動！」

龍可ＬＰ７０５０→８０５０

「ここでチェーン発動。手札からエフェクト・ヴェーラーを捨てて、ハミングバードの効果をエンドフェイズまで無効化する」

「そんな！」

手札は無限の可能性だ。だからこそ、起動確率の悪い【やりくりターボ】組み込んだ。俺は今、手札の大事さを噛み締めている。

手札は大事。今日の教訓にしておこう。

「でも手札から、古の森を発動」

「またか」

再度、庭が森に覆われる。

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×２

「１枚伏せてターンエンドよ」

「俺のターン。ドロー」

引いたのは、モンスターか。【フレムベル・マジカル】だ。

「俺は手札から、【憑依装着―ヒータ】を召喚。俺は【マジカル・コンダクター】のカウンターを2つ取り除いて、伏せカードと【古の森】を破壊する」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×0

【アーカナイト・マジシャン】の杖から出る光が、カードを破壊する。

それによってまたペントハウスの庭に風景が戻る。

「伏せカードは？」

「【救急救命】、ブラフだったのよ」

「チッ」

勿体無い事をした。まぁブラフと分かっただけで良しとするか。

これで気兼ねなく戦える。

「【マジカル・コンダクター】で守備表示のハミングバードを攻撃」

マジカル・コンダクター　攻１７００　６００　守　Ｎ・エア・ハミングバード

ハミングバードは戦闘により破壊され、光の欠片になって散っていった。

「【アーカナイト・マジシャン】でダイレクトアタック、【神秘魔導】！」

「うっ！」

龍可ＬＰ８０５０→５６５０

「ヒータでダイレクト！」

龍可ＬＰ５６５０→３８００

「俺はターンエンドだ」
「このままじゃ負けちゃう。お願い皆、私の思いに答えて……、ドロー！　やった！　私は手札の【黄金の天道虫】の効果で１０００ＬＰ回復。手札から、【プリンセス人魚】を守備表示で召喚。一枚伏せてターンエンド」

龍可ＬＰ３８００→４８００

プリンセス人魚　水　☆４　魚族
攻１５００／守８００

「あの伏せカードはなんだ？　俺のターン、ドロー」
あの喜び様、もしかして【聖なるバリアーミラーフォースー】か？　それなら俺のモンスターを攻撃宣言時に破壊できる。
「俺は手札から【憑依装着ーウィンー】を召喚。いくぞ、バトルだ。守備表示の【プリンセス人魚】を【マジカル・コンダクター】で攻撃」

マジカル・コンダクター　攻　１７００　８００　守　プリンセス人魚

「この時、罠発動！　【光の護封壁】！」
攻撃反応型の破壊カードじゃなくて、ロックカードだったか！
「このカードはＬＰを１０００の倍数払って、その数値以下の攻撃力を持つモンスターの攻撃を出来なくする。私はＬＰを３０００払うわ」

龍可ＬＰ４８００→１８００

だが龍可の手札に【黄金の天道虫】がいる限り、ＬＰは回復し続ける。ハンデス（ハンド・デストロイ）カードが来ない限り止められない上に、俺のデッキにハンデスカードは入っていない。
今は何でもいいから魔法カードが欲しい。
そうすれば発動して【マジカル・コンダクター】にカウンターを乗せて、【アーカナイト・マジシャン】であの護封壁を破壊できる。
「ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー。私は【黄金の天道虫】の効果で回復、そしてさらに【プリンセス人魚】の効果で毎ターン８００ＬＰ回復するわ。ターンエンド」

龍可ＬＰ１８００→３６００

「俺のターン、ドロー」
来たカードは、２枚目の【ディメンション・マジック】！
「俺は手札から、【フレムベル・マジカル】を召喚。そして手札から【ディメンション・マジック】を発動！　【フレムベル・マジカル】をリリースして、２体目の【マジカル・コンダクター】を特殊召喚、そして【プリンセス人魚】を破壊する！　さらに魔法を発動した事により、１体目の【マジカル・コンダクター】に魔力カウンターを２つ乗せる」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×２

「【アーカナイト・マジシャン】の効果発動、【マジカル・コンダクター】の魔力カウンターを１つ取り除いて【光の護封壁】を破壊する！　これでまたガラ空きだな、龍可！　【アーカナイト・マジシャン】でダイレクトアタック！」
「うっ！」

龍可ＬＰ３６００→１２００

「この瞬間をどれだけ待ち焦がれた事か！　これで最後だ、【憑依装着―ウィン】でダイレクトアタック！」

「きゃぁあああ！」

龍可ＬＰ１２００→０

睦月ＬＰ４８００

●●●

「あーあ、とうとう負けちゃった」

「いや、今回は【やりくりターボ】が初めて出来たのと龍可の引きの悪さだな。あまりロックカード来なかっただろ」

「それでも６枚程来たんだけどね。手札には【レベル制限Ｂ地区】もあったんだけど、【マジカル・コンダクター】と【アーカナイト・マジシャン】がいるせいで使えなかったの」

【レベル制限Ｂ地区】は☆４以上のモンスターを守備表示に変える永続魔法カードだ。

本来ならアタッカーを守備表示にしてしまって攻撃を堰き止めるロックカードだが、俺のフィールドに【マジカル・コンダクター】がいる事によってコンダクターに魔力カウンターが乗り、それを俺のターン【アーカナイト・マジシャン】で取り除き破壊する。という方程式が成り立ってしまい、魔法を発動できなかったと言う事だ。

まさかこの２体にはこんな使い方もあったなんて。俺自身、気が付かなかった。

やはり勝ったとはいえ、ビギナーズラックに近い形で勝利したのだから腕は龍可の方が断然上だな。分かっていた事だが。
「だが偶然とはいえ、勝てた事には素直に嬉しい。龍可とは何十回と闘ったのに、これが初勝利だからな。感動も一入だ」
ガッツポーズを作ってもいいくらい嬉しさが込み上げてきている。
一応、龍可の前なので自重はするが。
「いや、しかし疲れるな。龍可との決闘（デュエル）は」
「お疲れ様、睦月。良かったね勝てて、私もそろそろデッキを強化しようかな？」
「いやちょっと龍可？　それはもう少し待ってくれると嬉しいのだが……」
今回の勝利は偶然なのだから、これ以上強化されたら万に一つも勝てなくなる。
せめてもう少し勝率が上がるぐらいに成長してからでも遅くはないと思うんだが。
「ふふ、どうしようかな？　さぁ睦月、そろそろお昼にしない？」
「い、いやちょっと待て！　おい龍可聞いているのか！？」
龍可は後ろ手を組んで鼻歌を歌いながら歩いて行った。
まずい、嫌な予感しかしないぞ。
俺の昼からのやる事に、龍可の説得が追加されそうだ。

『お疲れ様です、睦月様』

「ん？」
何か今、俺を労う声が聞こえたような気がしたが……。
「ほーら睦月、早く行こう！」
「あ、ああ。待ってくれ、龍可」
まぁ空耳だろう。気のせいと言う事にしよう。

その数日後。
デッキ内容は変わっていなかったが、結局また負け続ける事になった。

▲▲▲

これはとある精霊の会話。
睦月はまだ知らない、その存在を。
そして精霊の存在を知りえる人物を。
それは存外、近くに潜んでいる。

『ったく、あんなノロっちい戦い方しやがって。もっとこう、バーって出来ねぇのかよ』
『仕方無いですよ。向こうは色々な方法で攻撃を止めようとしてきましたから』
『そうだよ。むしろご主人はよくやった方じゃない？　今の僕たちのデッキは除去カードに不安があるんだからさ』
『……【ツイスター】』
『そうだね。【ツイスター】ぐらいは入っていてもいいかな？　サイドデッキに入っていたら何かのカードと変えてもいいかもね』
『んな事俺が知るかよ。俺は小難しい事は嫌いな性質(たち)なんだ』
『それは皆知ってるって。でも、僕達はサポートがないと戦えないよ。魔法使い族で力押しは難しいし、普通のデッキでも、ただ単に力のゴリ押しでは戦っていない。やっぱり除去・解除カードはそれなりにいるんだよ』
『補うだけじゃなく、やはり足りないカードを集めるしかないので

しょうか？』
『……じきに集まる。気がする』
『そうなんですか？』
『まぁなるべく早く僕達を使いこなせるようになってもらわないとね。平和を享受する時間は、そう残されていないんだから』
『だけどよぉ、アイツ俺達の声さえ聞こえていねぇじゃねぇか。大丈夫かよそんなんで』
『睦月様には、もう少し経験が必要なんです。経験を積めば、いつか私たちの声も届くと思います』
『チッ、しゃーねぇ。それまで寝るわ。「果報は寝て待て」っつーしな』
『あ、ちょっと！　もう、自分勝手なんだから！』
『彼女の様に、私たちも待ちましょう。いつか、その時になるまで』
『……（コクン）』
『うー、分かったよ。早くしてよね、ご主人！』

そして彼女達は、眠りに就いた。

第3話「ＶＳ龍可」（後書き）

こんにちは。谷川です。最近執筆の調子が快調です。

初めての決闘、いかがでしたか？

書き方に四苦八苦した作品でした。

ほかの遊戯王作品の人はどうやって作っているのでしょうか。すごく気になります。

私はシュミレーターを二つ同時稼働させながら、基本的にそれに沿って決闘を書いてます。

一応、面白くする為に神様介入（作者介入）をしているのですが、分かりましたか？　実際に遊んでいる人、書いてる人、勘のいい人なら気付いていると思います。（もしかしたらバレバレなのかもしれませんが）

主人公のデッキは「霊使い（憑依装着）デッキ」でした。このデッキはあの精霊達の登場に必要不可欠だったので、主人公の第１デッキに持ってきました。

暫くはこのデッキで行きますが、途中から新たなデッキを使わせる予定です。勿論、このデッキは引き続き使いますが。

それと主人公のデッキは基本的に禁止・制限カードの項目を順守しています。今は２０１１／０３／０１日に設定されたリストを守っています。

ただし、他のキャラクターについてはそれは適用しません。ＯＣＧ化していないカードが出てきたりもしますが、あしからず。

次回も頑張っていきたいと思います。この間、初めて感想を貰い、狂喜乱舞しました。感想ドシドシ待ってます。よろしくお願いします。

それでは。

第4話「記憶」

●●●

朝6時。目覚まし時計の電子音によって起きる。
俺の朝はこの時間帯からだ。龍亞や龍可を起こすのに俺まで7時に起きてちゃ話にならない。
それに他の仕事もある。新聞を取りに行ってテーブルに置き、朝食が届けられるまでにゴミを捨てに行く。お玉とフライパンの選別。これは何に使うかは敢えて言わないでおこう。
その他諸々を1時間で済まし、龍可の部屋をノックする。まぁ大体自分で起きているが、龍可もまだ子供。たまに寝坊する時もある。それでもノックで起きる龍可は龍亞とは大違いだ。
そして龍亞を虐め……もとい起こしにいって大音響のお玉とフライパンのデュエットが奏でられる。
最近、なんだか龍亞が慣れてきた節があるので、そろそろ別の方法を考えなくてはならない。
次は「朝起きたら天井に逆さ吊り」にでもするか。
そこまでしたら自発的に起きる様になるだろう。
朝起きれない子供は、大人になっても起きれない事が多い。
大人になってから直すのは難しいので、今この時期に直してしまった方がいいだろう。
将来、困る事がないように。
「と言う訳で、朝の目覚めはいかがかな？　龍亞君？」
「……お陰様で、最近少し慣れてきたように感じるよ」

「そうか、それは良かった」
良くないと思うけどね……。とは龍亞の談。
「取り敢えず、着替えて顔を洗ってこい」
「はぁい」
今日もいつも通りな朝の風景が展開されていく。

●●●

「いつもここは賑やかだな」
俺は今、ペントハウスのあるホテルから近いカードショップに来ている。
世界中で超人気を誇るＤＭ（デュエルモンスターズ）を扱う専門店。店内はまだ昼前なのにカードを買いに来ているお客は相当数見かける。
「おや、睦月さんじゃないですか。今日はどんなカードをお求めで？」
店員が俺を見かけ、挨拶をしてくる。
ここは俺の行きつけの店（ここ以外に専門店を知らないだけだが）で、店員・店長達と仲がいい。
因みに、龍亞と龍可は一緒に来ていない。龍亞は朝の勉強課題で忙しいし、龍可もそれに駆り出されている。
時々連れてくるが、龍可が外に出るのを渋るのであまり一緒と言う事は少ない。
龍可の出不精？　もなんとかしないといけないな。なにかきっかけがあればいいのだが。
「この紙に書いてる物を頼む」
「あいあい、了解しました。しかしこういったカードをお求めとは、

いやー睦月さんも成長したもんですな」
そう言って店の奥に潜る店員。彼はここで働いて結構な年月になる中堅な店員だ。
俺が紙に書いたのは、俺用に魔法使い族関連のカードパックを1箱。
龍亞用にD（ディフォーマー）と、機械族関連のカードパックを1箱ずつ。
龍可は女性に人気なカードパックを2箱。
それと個人的に欲しいカードを単体で頼んだ。
「はい、お求めの品はここに全て。毎度ありがとうございます。今後とも、ご贔屓に」
「ああ、ありがとう」
袋の中を確認し、お金を払って店を出た。

●●●

ホテルの40を超える階層をエレベーターで昇り、ペントハウスに帰ってきた。
そこには既に目を輝かしている龍亞と、いつもの笑顔で迎えてくれる龍可。
今日は月に1度のカードを買う日と分かっているからこその反応だ。龍可はあんまり変わらないが。
「睦月おかえり！　それでそれでカードは！？」
「そう急くな。カードはちゃんとここにある」
テーブルに座り、先程買ってきた箱を龍亞と龍可に手渡す。二人とも一層笑顔が大きくなる。
「ありがとう、睦月。私も本当はついていきたいんだけど……」

「ゆっくりでいいさ。焦って余計に酷くなったら困るだろう？」
「そうよね。ありがとう睦月」
「構わんさ。さぁ二人とも、って既に龍亞は開けているか。龍可も開けてみるといい」
俺と龍可の会話なんてどこ吹く風だなまったく。
しかしこうして龍可と俺の会話をスルーする龍亞だが、外ではそれは絶対にないという事も俺は知っている。なぜなら龍亞は龍可が怖がらないように常に気を配っているからだ。
龍亞も兄として、龍可の事を気にしている。外で龍可が話しかけられた時に一番早く反応しているところからもそれが窺えるだろう。
龍可もそんな龍亞の事も頼りになる兄と認識している。だからこそいつも一緒にいるし、龍亞の事を気に掛ける。お互いを助け合ってる仲のいい兄弟だ。
そんな事を考えながらも、自分の箱のパックを黙々と開けている俺。どんなカードが出てきたかなんて分かっちゃいない。後で纏めて見よう。
「私は新しいカードは来なかったみたい。みんな持ってるカードだったわ」
「そろそろ違うパックに移らないとな、龍可」
「そうみたいね」
っていうか龍可。開け終わるの早いな。意外と器用なのか？
それとも慣れてしまっているだけか？
「おぉ！　なんだこれ、カッコイイ！」
そんな事を考えている最中に、龍亞が歓喜のあまりか、立ち上がっていた。
「何かいいカードでも当たったのか？」
喋っている間も作業中。
「えっとね、【パワーツールドラゴン】だって。シンクロモンスターだよ！」
「って事は、Ｄのリモコン・ライトン辺りのチューナーが必要だな」

「スコープンもだね、ねぇねぇ龍可。後で決闘(デュエル)しない？」
龍亞の誘いに頭を横に振る龍可。
「やめとく、睦月にお願いしたら？」
どうやら今日は乗り気じゃないらしい龍可。
まぁ元からあまり決闘をしようとはしない子だからな。その割には、天才デュエルっ娘と言われているらしいが。
「睦月はこの後なにかしなくちゃならない事はあるの？」
「いや、俺は大丈夫だが、出来ればこのカードを見てデッキを改良したいんだが」
そう言ってカードの束を持ち上げる。
「そっか。それじゃ、明日しようよ！」
「分かった。明日までに終わらせておこう」
「よーし、そうと決まったら俺もデッキを直そう！　龍可、手伝って！」
「え？　あ、ちょっと龍亞ったら！　片付けは！？」
やっといて、と言い残して既に龍亞は階段を駆け上っている。元気だな。
「龍可。行ってやれ。片付けはこちらで請け負う」
「え、でも……」
「いいから、行ってやれ」
「うん、ありがとう睦月」
そう言って龍可も階段に向かって駆けて行った。
甘やかしちゃ駄目だと分かっていても、やってしまうな。親バカと言われている人の気持ちが少し分かる気がする。
さて、俺も開封作業が終わったところだ。ゴミを捨てて自室に戻るか。

●●●

と言う訳で自室に戻ってきた。
自室は龍亞や龍可の部屋より少し大きい。因みに言うとベッドも多少大きい。恐らく両親が寂しい時に三人一緒に眠れる様に配慮したんだろうと思う。実際、雷の日とかは3人で眠る時もある。
部屋の真ん中に鎮座している大きい丸テーブルの前に胡坐をかく。そして今まで集めたカードを収納した箱を、近いベッド下の空間から取り出す。
そして腰についているデッキを収納するベルトから、２つのデッキを取り出す。
「しかし、このデッキ。いったい誰からの贈り物なんだ」
俺が普段使用している憑依装着を組み込んだ魔法使いデッキ。これは俺がここに落ちてきた時に鞄に入っていたデッキだ。餞別と書かれた紙と一緒に出てきた構築済みのストラクチャーデッキ。そしてそれが3つ。そこから出来たのが今のデッキだ。
俺には過去の記憶がない。落ちてきた理由も、記憶を失った理由も。何も覚えていない。
時々、龍可に対して何かの既視感を覚える事もあるが、記憶は戻りそうにない。
記憶喪失はきっかけがあれば戻る事もあると、本に書いてあった。俺にはそのきっかけが足りないのだろうか。
ベッドの下から鞄を取り出す。俺が最初から持っていた学生鞄。学生だった事はこの鞄によって察しはつくが、紙媒体の生徒手帳に書いてある地域名は、ネットで調べても出てこない。
俺の記憶の手がかりは、この生徒手帳と、このデッキだけ。しかもあまり役には立たないと来た。
「自然に戻るのを待つしかないのか」
少なくとも、今の俺には出来る事がない。
今の俺に出来る事は、居候させてもらってる両親の代わりになる事だけだ。それもきちんと出来ているかは怪しいが。

さて、そろそろデッキを改良するか。新しいデッキもそろそろ形になってきたところだ。

俺は記憶の事を頭の端に無理矢理押しのけ、デッキの改良の没頭した。

第４話「記憶」（後書き）

こんにちは。谷川です。読了、ありがとうございます。

今回の話は、３話目で出す予定だった１話目の最後に会ったストラクチャーの話を最後に組み込む為の話でした。前回の時に忘れてたんです。

次回は龍亞との決闘を予定します。３話目の決闘話は色々苦労した上に効果を間違えていたり、忘れていたりで大変でした。次は気を付けます。

それでは。次回もお願いします。

第5話「VS龍亞」

●●●

「課題は？」
「終わった」
「デッキは？」
「万全。睦月兄ちゃんは？」
「当然」
お互いにデッキを右手に持ち、白昼の下に晒す。
今は昼で、ペントハウスの庭。昨日約束した龍亞との決闘を今まさに行おうとしている。
基本的に決闘はＤ－ディスクのソリッドビジョン機能を使用するので、家の中ではやりにくい。
だから決闘は絶対に外でする事になっている。雨の日はＤ－ディスクを使用しない決闘をする。
「なら準備はいいね、行くよ！」
「ああ」
「「決闘―デュエル―！！」」
二人の掛け声で、火蓋は切って落とされた。

●●●

「先攻は龍亞からだ」

睦月ＬＰ４０００
龍亞ＬＰ４０００

「オッケー。俺のターン、ドロー。シャキーン！」
謎の擬音を吐きながらドローを行う龍亞。本人は満足しているのでまぁ良しとしよう。
「俺は手札から、【Ｄ・モバホン】を攻撃表示で召喚！」

Ｄ・モバホン　地　☆１　機械族
攻撃力１００／守備力１００

モンスターカードから黄色いケータイが出てくる。そしてそれは変形し始め、変形が終わる頃には人型になっていた。
このＤ（ディフォーマー）という種類のモンスターは表示形式で効果と姿形を変える面白いカードだ。
「モバホンの効果を発動、ダイヤル、オン！」
龍亞の掛け声に反応してか、モバホンの胸にある１～６のボタンがランダムで１つ明滅する。
そして４のボタンが光ったまま明滅が止まる。
これはモバホンの攻撃表示効果。出た数字の枚数デッキをめくり、その中でＤと名の付くモンスターを特殊召喚する事が出来る効果だ。
「俺はこの４枚の中から【Ｄ・キャメラン】を選択し、攻撃表示で特殊召喚！」

Ｄ・キャメラン　光　☆２　機械族
攻８００／守６００

今度はカメラがカードから出てきて、また変形して人型になる。
「めくった残りカードをデッキに加えてシャッフル。俺は１枚を伏せてターンエンドだ」
「俺のターンだ。行くぞ、ドロー。俺は手札から永続魔法、【魔法族の結界】を発動。そしてさらに永続魔法【強者の苦痛】を発動。このカードは、相手全てのモンスターを☆（レベル）×１００攻撃力を下げる」
「げっ！」

☆１　Ｄ・モバホン　　攻撃力１００→０
☆２　Ｄ・キャメラン　攻撃力８００→６００

「さらに手札から【魔導戦士　ブレイカー】を召喚。ブレイカーの効果は自身に魔力カウンターを１つ乗せ、その個数分、攻撃力を３００上げる。そしてブレイカーの効果でこのカウンターを１つ取り除く事で、相手の魔法・罠カードゾーンのカードを１枚破壊する」

魔導戦士　ブレイカー　闇　☆４　魔法使い族
攻１６００／守１０００

魔導戦士　ブレイカー　魔力カウンター×１
魔導戦士　ブレイカー　攻撃力１６００→１９００

魔導戦士　ブレイカー　魔力カウンター×０
魔導戦士　ブレイカー　攻撃力１９００→１６００

「しまった、俺の【Ｄ・バインド】が！」
「俺にＤＭを教えてくれたからって、手加減はしないぞ龍亞。ブレイカーでモバホンに攻撃！」

魔導戦士　ブレイカー　攻１６００　０　攻　Ｄ・モバホン
龍亞ＬＰ４０００→２４００

「うわ！　くっ、やったな！」
「くく、俺は１枚伏せてターンエンドだ」
「行くぞ、俺のターンだ！　ドロー！　よし、俺は手札から通常魔法、【Ｄ・スピードユニット】を発動！」
スピードユニットは手札のＤと名の付くモンスターをデッキに戻し、フィールド上のカードを破壊する万能除去カード。そしてその後にデッキをシャッフルし、１枚ドロー出来るので実質ノーコストの１対１交換に持っていける。Ｄの中でもかなり優秀な魔法カードだ。
「俺は【魔導戦士　ブレイカー】を選択して、破壊する！」
「チェーン発動！　速効魔法【ディメンション・マジック】！　俺は場のブレイカーをリリースし、【憑依装着―ヒータ】を召喚！さらに効果で【Ｄ・キャメラン】を破壊する！」
「う、でも、スピードユニットの効果で、１枚ドロー」
「しかし龍亞のフィールドには何もないぞ。さぁどうする」
「くっ、俺は手札から【Ｄ・キャメラン】を守備表示で召喚。１枚伏せてターンエンド」

☆２　Ｄ・キャメラン　攻撃力８００→６００

カードからカメラが出てくる。今回は変形せず、守備を示す淡い青色になっている。
「俺のターン、ドロー。手札から【憑依装着―ヒータ】をもう１体召喚、１体目のヒータでキャメランを攻撃する！」
「罠（トラップ）発動！　【ディフォーム】！　このカードはＤと名の付くモンスターが攻撃対象に選択された時に発動可能。攻撃モンスター１体の攻撃を無効化して、攻撃対象に選択されたＤの表示形式を変更す

る！」
カメラは変形し、また人型になる。
「だが俺にはもう1体ヒータがいる、キャメランに攻撃！」
「うっ！」

憑依装着―ヒータ　攻１８５０　６００　攻　Ｄ・キャメラン
龍亞ＬＰ２４００→１１５０

「だけどこの時、キャメランの効果が発動！　手札・墓地からＤと名の付く☆４以下のモンスターを特殊召喚する！　守備表示で、出て来い【Ｄ・モバホン】！」

☆１　Ｄ・モバホン　攻撃力１００→０

「面倒な奴が出てきたな。俺は1枚伏せてターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！　モバホンの効果発動！　ダイヤル、オンッ！」
モバホンの胸のボタンがランダム明滅を始める。守備表示の場合、効果はめくったカードをそのまま戻す効果に代わる。
出た数字は……３か。
「今度はモバホンを攻撃表示に変更、もう一度ダイヤルオン！」
そしてもう一度効果発動。今度は攻撃表示なので、Ｄを特殊召喚できる。
出た数字は……６！？
「よし！　俺はこの６枚の中から【Ｄ・チャッカン】を攻撃表示で特殊召喚！」

Ｄ・チャッカン　炎　☆３　炎族
攻１２００／守６００

今度はライターが出てくる。変形して多少不格好だが人型になり、頭には火を吐く放射器が飛び出ている。
「そして手札から、【Ｄ・リモコン】を召喚」

Ｄ・リモコン　地　☆３　機械族・チューナー
攻３００／守１２００

なにかのリモコンは変形し、平べったいが、人型になる。
「☆１の【Ｄ・モバホン】と☆３の【Ｄ・チャッカン】に☆３の【Ｄ・リモコン】をチューニング！」
リモコンは３つの緑の円環になり、空中で固定される。
そこをチャッカンとモバホンが通り、オレンジ色のモンスターの型枠になる。
「世界の平和を守る為、勇気と力をドッキング！　シンクロ召喚！
愛と正義の使者、【パワー・ツール・ドラゴン】！」
おお、なんとも龍亞らしい前口上だ。まぁ子供だしな。良しとしようじゃないか。前口上は、な。
悪いが、俺は手加減はしないと言ったぞ。龍亞。
「罠発動！　【神の宣告】！　このカードは自分のＬＰの半分を払って、魔法・罠の発動、相手モンスターの召喚・特殊召喚を無効にし、破壊する！」

睦月ＬＰ４０００→２０００

「ええ！？　そ、それじゃあ俺の【パワー・ツール・ドラゴン】は……」
龍亞の視線の先のドラゴンは、光の欠片になって粉々になって消えていった。
「そ、そんなぁ……」
「大抵のモンスターは、召喚出来なければ大きな脅威となりえない。

そして落ち込んでいる場合じゃないぞ龍亞。このままお前がターンを終了すれば、俺の【憑依装着―ヒータ】がお前に止めを刺す。さ、どうする？」
「う。い、１枚伏せてターンエンド！」
「俺のターン、ドロー」
龍亞は自身の伏せたカードをチラチラと見てる。明らかに怪しいぞ、龍亞。
俺は１つ溜息を吐く。
「龍亞、そんなにチラチラと見たら怪しいぞ。伏せたカードがたとえブラフでも自信を持って敵を見据えろ。その態度が、相手に不安を持たせる。そんなにチラチラと見ていたら、カードの程度が知られてしまうぞ」
「うっ。そ、そんな事、睦月兄ちゃんに言われなくても分かってるよ！」
「と、言う訳でここは臆さず攻めるとしよう。【憑依装着―ヒータ】で止めだ！」
「うわぁああ！」

龍亞ＬＰ１１５０→０
睦月ＬＰ２０００

●●●

「あーもう！　また負けた！」
その場に腰をドカッと下ろす龍亞。

「これで3連敗だな。なぁ龍亞先生？」
「ムキー！」
ははは、怒ってる怒ってる。
「もう、睦月。それぐらいにしてあげたら？」
「龍可。来てたのか」
「もう龍亞を超えちゃったね。ＤＭをやり始めてまだ1年も経ってないのに」
「そういえば今月で１０ヶ月目だな」
っていう事は俺がここに落ちてきて１０ヶ月が経ったんだな。月日の進みは早いものだ。
「そういや、俺と龍可の誕生日は2ヶ月後だよね。俺たちが睦月兄ちゃんを見つけたのが誕生日2日後だから」
「そうだったのか」
「うん、だから親も珍しく休暇を作ってくれたの。去年は久しぶりに家族全員で誕生日を迎えられたのよ」
成程。１０歳の誕生日に頑張って休暇を取って、2人を祝って3日後に帰る予定だったのが、その3日間に俺が落ちてきたのか。
「そうか。それなら、祝いの用意をしておかないとな」
「勿論、睦月のもね」
「俺の？」
龍可に聞く。何故俺の祝われる用意までする必要がある。
俺は祝う方だろう。
「あったりまえじゃん！　睦月兄ちゃんは俺らとおんなじ誕生日なんだから！」
龍亞が勢いよく立ちあがる。
誕生日が同じって、いつの間にそんな事になっていたんだ？
「いいじゃない。私たちと誕生日が殆ど同じなんだから。皆一緒で祝いましょう」
「そーそー」
「まったく、お前達は」

２人が俺を見上げて、同時に微笑む。
俺は２人の頭を思わず撫でていた。
「なら、今年の誕生日は３人で祝おうか」
「「うん！」」
そうして俺達は、３人で手を繋いでペントハウスに戻って行った。
二人の手は、とても温かかった。

第5話「VS龍亞」（後書き）

こんにちは。谷川です。読了、ありがとうございます。

今回は龍亞のパワーツールを出す筈だったんですけど……、シュミレーターでの主人公のデッキが回る事回る事。まぁ前口上を言わせたかっただけなので、いいかなって。龍亞の魅力は龍可を守る時の必死さにあると勝手に考えてますので。（龍亞ファンの人ごめんなさい）

主人公が来てそろそろ1年。7話ぐらいまで原作前の話で、それから原作に入って行こうかなと考えてます。

次回も頑張りますので、よろしくお願いします。

それでは。

第6話「デュエルアカデミア」

●●●

「デュエルアカデミア？」
≪ああ、睦月にも編入予定の手続きをして欲しいのだ≫
とある夜、この家には珍しく電話が掛かってきた。
電話に出ると相手は父親さんだった。
忙しい身の上に、外国との時差もあって、こんな夜に電話を掛けてきたのだろう。因みに今は夜もいいとこの１１時。
「それは、龍亞達と一緒にアカデミアへ通えって事ですか？」
≪その通りだ。君も知っているように、龍可の体調不良で今は２人ともアカデミアを休学している。しかし君が来て以来龍可の声は明るく、そして力強く元気な声になっていった。そろそろ私たち親は復学を考えているのだよ≫
「確かに、龍可の体は前みたいによく体調を崩す事は少なくなってきていますけど、俺はあまり関係ないんじゃないですか？」
≪そんな事はない。事実、君の存在は龍可や龍亞の支えになっている。今までずっと二人で過ごさせてしまった。心寂しい思いをさせてしまった。それは私たち親も同じだ、よく分かっている。だからこそ、君の存在は二人の心を暖めてくれた。２人共まだ子供。頼りになる人物が傍にいるかいないかは、大きな違いだ≫
俺の存在が支え。
俺がここに来る前は、二人とも寂しい日々を過ごしていたのか。

お互いに寂しさを紛らわし、助け合って過ごしてきた2人。龍亞が異常に龍可を気に掛けるのも、龍可を守る人が自分しかいなかったからなんだろうな。
龍亞達の部屋がある2階に視線を移す。
2人の顔が見える訳じゃないが、今まで見た安らかな寝顔が浮かんでくる。
その顔を思い出しているだけで、自然と答えは決まっていた。
「分かりました。アカデミアの編入予定手続き、条件付きなら受けましょう」
≪条件とは？≫
「まず、この話を龍亞達に話します。その上で、2人が学校に戻りたいと言えば受けましょう」
≪なんだその事か。それは勿論。いずれ話さねばならない事だ≫
「それともう1つ、俺の小遣いを上げてもらってもいいですか？」
≪ふむ？　まぁ構わないが、何に使うのだね？　君がそんな我儘を言うなんて珍しいじゃないか≫
「実は、【Ｄ－ホイーラー】としてのライセンスを取ろうかと思ってます」
≪ほう。だがそれはどうしてかね≫
Ｄ－ホイーラーとは、【Ｄ－ホイール】と言うバイクだ。
このバイクは乗りながらでも決闘が出来る様に、Ｄ－ディスクがちゃんと内蔵されている。
そしてこのＤ－ホイールで決闘する場合は、【ライディングデュエル】と言う種類の決闘方式をとる。
勿論、移動手段としても普通に使えるバイクだ。
「2ヶ月後に、2人の誕生日なのは覚えていますか？」
≪当たり前だ。我が子の生まれた感動すべき日を忘れる訳がない≫
「その誕生日に、海に連れて行きたいなと考えているんです」
≪成程、それが君からの誕生日プレゼントと言う事かね≫
「はい。バイクはレンタルでもいいんですが、その為にはライセン

スが必要なんです。そのライセンス取得の受講料が、少し高くて」
払えなくもないが、俺の今の小遣いの8．5割を持っていかれるのは、やはり厳しい。
やりくりの予定で頭を悩ませていたが、もし小遣いが上がればもう少し楽になる。
≪成程そういう事なら、全額、私が負担しよう≫
「え？　いや、なにもそこまでしなくても大丈夫ですよ！　受講料も安くないんですよ！」
≪何を言う。かわいい我が子3人の為だ。これぐらいどうという事はないさ。それに、君が我儘を言う事は滅多にないからな。こんな機会を逃す親はいるものか≫
「父親さん……」
≪親はいつまでたっても、子供には見栄を張りたがるのさ。たまには私達を頼りなさい。睦月はもう、私達の子供だ≫
――やばい、涙腺が壊れる。
真剣に泣きそうだ。必死にこらえているが、既に数粒流れてしまっている。
そういえば、ここにきて泣くなんて初めてだな。
「ありがとう、ございます」
≪ああ、今日はもう寝なさい。そっちは夜遅いだろう≫
「はい、お休みなさい。父親さん」
≪2人の事、これからもよろしく頼むよ≫
その言葉で通話は切れた。
その日は、なかなか寝付く事が出来なかった。

●●●

「そう、そんな事をお父さんが」
「ああ。どうする、龍可」
翌日、早速龍可にアカデミア復学の事を話してみた。
「私は、行きたい。睦月や龍亞と、一緒にアカデミアに行きたい」
「でも龍可。体は大丈夫なの？」
心配そうに龍亞が龍可を見つめる。
そもそも体調が安定しないのが理由で休学しているのだ。龍亞の心配はもっともだ。
「大丈夫よ。ここのところ調子はいいし。たとえなにかあっても、今は龍亞に睦月もいるもの」
「そうか。なら、俺はデュエルアカデミアへの編入手続きを済ませてこよう」
「でも大丈夫？　確か筆記試験は難しいって聞いたけど」
「過去問を見て、そう難しい事は無かった。９０点相当をとれるなら問題はないだろう」
なにせ決闘関係の事が大きく点を占めていたからな。
苦戦したのは一般課目の数学ぐらいだろう。
因みに、決闘関係の配点は６０点だった。いくらなんでも多くないか？　まぁ俺としては有り難いが。
「凄いじゃん睦月兄ちゃん！　それなら楽勝だね！」
「ああ、任せておけ。じゃあ俺はアポを取ってから出かける。龍亞達は課題を終わらしておくように」
「うえ～！」
明らかに嫌そうな顔をする龍亞。
その表情に微笑みながら、俺は自室へと戻って行った。

●●●

電話をすると、既に昨日の内に大体の手続きは終わったと聞いた。恐らく父親さんの仕業だ。
そしてペントハウスから出ておおよそ約２０分程歩いたところに、デュエルアカデミアがあった。
大きさに驚嘆しつつ、中に入る。
門の管理人に職員室の場所を聞き、そこで先生らしき人と対面した。
「君があの龍亜君達のお兄さんだね。昨日、父親さんから電話があって編入の話を聞いたよ。今回の編入試験の試験官は僕が務める事となった。よろしくね」
「はい。よろしくお願いします」
と言う訳で部屋を移動し、筆記試験開始。
正直、そう難しくはなかった。
内容を一部抜粋。

問１　サイキック族のサポートカード、【脳開発研究所】について答えなさい

（１）【脳開発研究所】のカード効果の内容を、以下から一つ選んで正解を答えなさい

ａ　自分フィールド上に存在するサイキック族モンスターの効果を発動する為にライフポイントを払う場合、代わりにこのカードにサイコカウンターを２つ置く事ができる。
ｂ　このカードがフィールド上に存在する限り、通常召喚に加えて１度だけサイキック族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
ｃ　このカードがフィールド上から離れた時、このカードのコン

トローラーはこのカードに乗っているサイコカウンターの数×１００ポイントダメージを受ける。

（２）以下の中から間違った内容を選択しなさい。

ａ　【メンタルプロテクター】の維持コストの代わりとして、サイコカウンターを乗せる。

ｂ　【脳開発研究所】の効果で、通常召喚に加えてモンスターを守備表示で特殊召喚。

ｃ　【脳開発研究所】が破壊され、カウンター×１０００ＬＰダメージを負う時、【ハネワタ】でダメージを０にした。

こんな感じ。難しいって言うより捻くれた問題が多かった。

●●●

「すごいじゃないか。満点だよ。過去にデュエル科目で満点をとった生徒は１０人程しかいないんだよ」

試験官の先生にそう言われた。

別にそう難しい問題じゃなかった。捻くれてはいたが。

ＢＰ（バトルフェイズ）やダメージステップ、後は優秀で人気なカードを知っていたら殆ど解ける。

ルール系が少し難しかったかな。

「筆記の方は問題なさそうだね。決闘関係が７０点以下なら普通科目も受けてもらうんだけど、そんな必要はないようだ」

そうだったのか。それは嬉しい。手間が省ける。

「それじゃついてきて。決闘場で実技試験に移るよ」

●●●

試験官についていくと、通常考えられる体育館の2倍ぐらい大きな建物に着いた。
「この中が決闘場だよ、授業の実技は基本的にここで行われているんだ」
そう言って扉を開ける試験官。後ろから見てるだけでも相当に広いぞ、これは。
「おや？」
「ん？　どうしたんですか？」
「いや、あそこに……」
試験官が真っすぐ指をさす。
そこには赤いスーツ？　のような服を着た誰かがいた。
「お待ちしておりましたよ、日森　睦月君」
「ハイトマン教頭！　どうしてこちらへ？」
どうやら奇怪な姿をした人は教頭らしい。
言葉で形容するのが難しいリーゼントのなり損ないの様な深緑色の髪型に、横に細く長く伸びた髭。そしてレンズ部分がオレンジ色の逆三角形をくっつけたサングラス？　をかけた人物。
第一印象、奇っ怪な人物。
「あなたの報告では、彼は筆記試験で満点を取ったようですねぇ」
「はい。私も驚きましたが、事実です」
一応、頭を軽く下げておく。
しかし教頭は、眼を細くして睨みつけてきた。
「怪しいですねぇ。我が校はデュエルアカデミアでも模範たるネオ童実野校。そのレベルは普通のアカデミアより遙かに高い。それを

編入試験とは言え、満点とは。いやはや、一体彼はどんな手を使ったのでありましょうなぁ」
「教頭！　そんな事は彼は」
「あなたは暫く黙るであります！」
「うっ……！？」
叫ぶ教頭。静かにしてほしい。
何故俺が不正行為をしたと決めつけているのだろうか。勘違いも甚だしい。
「と、言う訳で。その確認含めて私と決闘してもらうであります。私に勝てば、あなたを特待生としてこの学校に迎えましょう。それぐらいの点数は取っているでありますからねぇ。しかし負ければ、あなたは私の監視下でもう一度試験を受けなおしてもらうであります。因みにこれは決定事項であります。異論は、認めましぇん」
言い終わると、自信があるのか俺に向けて嫌な笑いを浮かべてきた。
気持ち悪い。
だが俺は受けさせてもらっている側だ。そう大きく出られない。
まぁ、決闘ならどうかは知らないが。
「分かりました。これも試験の一環として、受けさせてもらいます」
「よろしい。それでは、あちらのプレイヤーゾーンに移動してもらうであります」
そう言って俺は歩き出す。
その時、俺の肩をさっきの試験官が掴む。
「すまない。俺ではどうしようもない。気をつけてくれ、教頭はかなり強い」
「ありがとうございます。それに、先生が謝る必要はないですよ。それでは」
さて、俺の知識の正当性を訴えてくるか。

●●●

「そうそう、言い忘れていましたがこの決闘は変則決闘であります。お互いＬＰ２０００から、ターン数は５ターンまで。そのターン数をクリア出来れば、あなたの勝ちであります」

変則決闘か。ＬＰ２０００のみ。

となると、魔法使い族のデッキでは不利だな。攻撃力の低さは否めないから、上級モンスター、あるいはアタッカーの餌になってしまう。まぁ５ターンまで稼げば勝てるのだが、出来るならあの教頭の驚く顔を見てみたい。

だったら、まだ不完全だがコイツを使うか。

「分かりました」

俺はＤ－ディスクにいつもと違うデッキを差し込み、Ｄ－ディスクがそれをシャッフルする。そしてＤ－ディスクの下部が虹色に光り、エネルギーがＤ－ディスクを巡る。

後は手札を５枚ドローし、これで準備完了だ。

尚、このＤ－フィールドは特殊で、このＤ－ディスクからでる電波を地面の下でキャッチし、伏せカードやモンスターカードのソリッドビジョン表示をサポートするようになっている。

「んふふ、いくでありますよぉ～！」

「いつでも」

「それでは」

「「決闘―デュエル―！！」」

ハイトマンＬＰ２０００

睦月　　ＬＰ２０００

「先攻は私が頂くであります。ドロー。ぬっふっふ」

なにやら広げた手札を見て気味の悪い笑いを浮かべている。
早くしろ。
「私は手札から【古代の機械像（アンティークギア・スタチュー）】を召喚であります。」

古代の機械像　地　☆２　機械族
攻撃力５００／守備力０

古代の機械（アンティークギア）デッキか。やはり魔法使い族でなくて良かった。
守備表示にして時間を稼いでも、貫通効果を持ってるモンスターがいる古代の機械デッキには無意味だ。
それなら、まだこのデッキの方がいい。
「そして手札から通常魔法、【機械複製術】を発動！　この効果によって、デッキから【古代の機械像】を２体特殊召喚であります」
【機械複製術】、自分の攻撃力５００以下の表側モンスターを選択し、同名カードデッキから２体まで特殊召喚するカード。
しかしあのモンスターは何なんだ。そこまでして呼ぶカードなのか？
古代の機械のカードは少し知っているが、あんなモンスター初めて見た。
「そして【古代の機械像】のモンスター効果発動。このモンスターをリリースする事によって、手札から、【古代の機械巨人（アンティークギア・ゴーレム）】を召喚条件を無視して特殊召喚であります！」
成程、その為か。なんという効果のモンスターだ。古代の機械デッキに１～２枚は絶対に欲しいカードだな。ステータスも低いからサルベージ・リクルートも容易い。
しかし３枚も手札にあるのか？
「私はこの３体の【古代の機械像】をリリースし、３体の【古代の機械巨人】を特殊召喚でありますぅ！」

古代の機械巨人　地　☆８　機械族

攻３０００／守３０００

ちっ、あったのか。

「先攻は攻撃出来ません。しか～し、あなたにこのモンスター達を超えるのはほぼ不可能でしょう！　あなたにはもう一度試験を受けなおしてもらうであります！　私はここでターンエンドであります！」

▲▲▲

くっくっく、どうです？　思い知りましたかこの勝ち組デッキのハイレベルコンボを。

私の場には【古代の機械巨人】が３体も！　あぁ、夢の様な光景ではありませんか！

ＬＰ４０００決闘でも１ターンキルを十分に狙える状況であります。しかもこの決闘は変則決闘でＬＰは２０００ぽっち。私の勝ちは揺るぎないであります。

あの試験の点数は簡単に取れる筈はありません。間違いなく、彼は何かを仕組んでいるであります。

その化けの皮、今すぐ剥いでやるでありますよ～！　んっふっふっふ。

●●●

ったく、最上級モンスターを馬鹿のように並べて喜んで。子供かあの教頭。

しかし王手を打たれているのは紛れもない事実。
手札の良し悪しはデッキ構成だけで決まる訳じゃない。あくまでいいカードを引き易くするのがデッキ構成だ。
しかし、初期手札がいいのはあんただけじゃないぞ。
「ハイトマン教頭。カードを伏せなくていいのですか？」
「な～にを生意気な。そんな物はなくても、十分勝てるであります。何せあなたは、その手札６枚で、このターンの間に、この【古代の機械巨人】を３体とも対処しなければいけないのですよ。その上、この【古代の機械巨人】には自身の攻撃の際に、その戦闘の間罠を封じ込める効果を持っているであります。つまり！　あなたは【炸裂装甲】の様な攻撃反応型除去カードは発動不可能。この状況下で伏せカードなんて必要ないであります」
子供でも分かる事をベラベラとご苦労な事だ。
「分かりました。それでは俺のターン。ドロー」
確認はしたぞ教頭。その驕り、潰してやる。
今日は手札も良い事だしな。
「俺は手札からカードを１枚捨てて、通常魔法【ライトニング・ボルテックス】を発動！　相手の表側モンスターを全て破壊する」
「へ？」
暗雲が部屋の中に突如現れ、３本の雷を落とす。その雷は寸分の狂いもなく【古代の機械巨人】に降り注いだ。
「な、なんですと～！！」
「教頭がＬＰ２０００の変則決闘を挑んできたんですよ。後で勘違いはしないで下さいね。俺は手札から、【ゴブリン突撃部隊】を召喚！」

ゴブリン突撃部隊　地　☆４　戦士族
攻２３００／守０

まぁこの時点で既にＬＰ２０００を超えてはいるんだが、もう少

し攻撃力を上げるぐらいなら許してくれるだろう。
「更に手札から、装備魔法【愚鈍の斧】を2枚、【ゴブリン突撃部隊】に装備させる」
【愚鈍の斧】はモンスターの効果を打ち消してしまう代わりに、攻撃力を１０００アップさせる。そして毎ターンのスタンバイフェイズに８００ＬＰを払う事になる。
正規決闘で８００のダメージは中々大きい。
ハイリスク・ハイリターンなカードだが、そのリスクやデメリットを打ち消す、あるいは有効活用するのがこのＤＭでデッキを作る時に必要な力となる。勿論、ローリスク・ハイリターンなカードも色々存在しているのだから、そういったリスクを少なくしてデッキを作るのも一つの手だ。
因みにさっき【ライトニング・ボルテックス】で墓地に送ったカードは【レベル・スティーラー】。
このカードは墓地にいる事で、自分の☆５以上の上級モンスターから☆１を取って（正確には下げて）特殊召喚できるモンスター。こうやって【ライトニング・ボルテックス】のデメリットをメリットに変えた。こういうプレイングがＤＭで必要なのだ。

ゴブリン突撃部隊　攻撃力２３００→４３００

「ヒィ！」
お、驚きの連続で顔が青ざめてる。いい気味だ。
これで正規決闘のＬＰ４０００でも勝てる攻撃力になった訳だ。言い逃れできないように念の為。
さて、俺を疑った罰としてお仕置きでも受けてもらおうかな。
俺のＯ★ＳＨＩ★Ｏ★ＫＩは、某出っ歯芸人のお仕置き部屋の様に優しくはないぞ。
「【ゴブリン突撃部隊】で教頭に直接攻撃。やれ、ゴブリン」
「ぬぉあぁぁぁ！！！」

ハイトマンＬＰ２０００→０
睦月　　ＬＰ２０００

結論、教頭は☆４のモンスターでも普通に勝てる。
今後の役に立つかは知らない。
まぁ兎にも角にも、無事に入学できそうだ。

●●●

「教頭と戦ったー！？」
バンッとテーブルを叩いて立ち上がる龍可。おっどろいた。
まさか龍可がこんな行動に出るなんて思いもよらなかった。
「なんだ、あの教頭そんなに有名人なのか？　いや、まぁ確かに珍妙な格好をしていたが」
あの恰好を思い出す。本当にピシッとしているのだか、芸人の真似をしているのだかよく分からない教頭だったな。
「そんな事じゃないわ。ハイトマン教頭は先生の中でもトップクラスの実力を持つ人と言われているのよ。編入試験はどうなったの？
まさか落ちた！？」
「いや、普通に編入できたけど。しかも特待生で」
「特待生！？」
「ああ。あのハイトマン教頭が、私に勝ったら特待生で迎える、とか言ったからな」
別に再試験を受けても良かったが、色々と予定が詰まってた事だし、手っ取り早く終わらせるつもりだった。

勝てばそこで試験終了。しかも特待生。だったら勝つしかないだろう。
「と言う事は、もしかして勝ったの？　あのハイトマン教頭に？」
「ああ。言う程強くなかったぞ。龍可でも頑張れば勝てるんじゃないか？」
龍可のデッキをシモッチバーンにしてしまえばだが。
いや、あれは本当に強烈だ。
【成金ゴブリン】を発動されると、相手は1枚ドローしてこっちはＬＰ１０００ダメージだ。普通に痛い。
ま、龍可がモンスターカードを抜くとは思えないが。
何故だか龍可は自分のデッキに何かしらのこだわりがあるらしい。
事実、まったく龍可のデッキに必要のない【サンライト・ユニコーン】が入っているぐらいだ。
何回か龍可のデッキを見て、その都度デッキコンセプトを探るが、やはりキュアバーンなのは変わらない。
なのに毎回【サンライト・ユニコーン】は入ってるし、バーンカードが少ないし。
本当に龍可のデッキはよく分からない。なのに強い。不思議だ。
やはり全てプレイングなのか。
「ん？　そろそろ夕食か。準備をするか。２人はここにいろ。俺は夕食を受け取ってくる」
ここはペントハウスだが、それより下はホテルとなっている。
よって食事は備え付きのバイキングレストラン（無料）で取るのだが、龍可があまり人が多い所を敬遠したがるので朝食だけを部屋に運んでもらって昼食、夕食だけは俺が取りにいっている。
既に厨房のコックさんとは談話する位に仲が良くなった。
毎日作ってくれるコックさんや、毎日運んでくれる従業員の女性にも感謝をしている。
しかしこの待遇、やはりあの父親さんと母親さんは何の仕事をしているんだろうな？

そんな事を考えながら、俺はレストランの階層まで行く為にエレベーターに乗り込んだ。

●●●

睦月兄ちゃんが夕食を取りに行った。
その間俺と龍可は言いつけ通り、テーブルに座っている。
だけどこのまま会話がないと暇はなので、少し気になった事を聞いた。
「ねぇ龍可。睦月兄ちゃんの事どう思う？」
「どうって？」
「睦月兄ちゃん、なんかメキメキと強くなってない？　アカデミアの勉強をしてる俺達より強い気がするんだけど」
最近睦月兄ちゃんと戦って勝った回数が目を疑うほどに下がってきた。
負けるだけならいいんだけど、最近はダメ出しをされる程になってきた。それも正しいから反論できない。
「龍亞もそう思う？　私は決闘が体に負担をかけるから最近睦月と決闘してないけど、龍亞との決闘を見てるだけでも分かる。睦月は明らかに、知識を得た戦い方をしてるわ。それも結構高度な。魔法使いのデッキ上、あまりそういったプレイは見つけにくいけど、昔と比べたら全然違うもの」
やっぱり龍可も気付いていたんだ。
「実は俺、見ちゃったんだ。睦月兄ちゃんが違うデッキを持ってるの」
「睦月が？」

「うん、ちょこっと中を見たけど、魔法使い族と全然違うデッキだった。それに、なにか作りかけの様なデッキもあった。間違いないよ。睦月はデッキを複数持ってる」
それにしても睦月兄ちゃん、俺が覗いてる事なんてまったく気にせずデッキを改良していた。
あんな表情の睦月兄ちゃん、決闘中でもあまり見ない。
「なんだかその内、睦月が離れていっちゃいそうで怖いな。強くなっていくのはいい事の筈なんだけど」
「俺もだよ、龍可。それによく考えたら、俺達あんまり睦月兄ちゃんの事よく知らないんだよ。なんで落ちてきたか、とかは無しにしても、あまり睦月兄ちゃんは自分の事を話してくれないから」
「そうね。いっつも私達を優先して、私達を気遣ってくれて。嬉しいけど、私達はなにも睦月にしてあげられてないものね」
睦月兄ちゃんがきて、二人だけの生活が一気に変わった。
いっつも愉しくて、多少世話焼きすぎなところもあるけど優しくて、俺達もそれに甘えて。
いつも一緒にいてくれて、まるで親が増えたみたいだ。
「私達が睦月にできる事って、何なんだろう」
内心、俺は龍可と同じ事を考えていた。

第６話「デュエルアカデミア」（後書き）

こんにちは。谷川です。読了、ありがとうございます。

どうでしたかこんかいの決闘は。手っ取り早く終わらせてみました。

こういうハイテンポな決闘は、書いてても胸が躍ります。なにせ回して回してデッキを使ってる！　っていう感覚になりますから。

と、言う訳で睦月デュエルアカデミアに特待生編入学。そして知識がバンバン頭に入ってる睦月。自分が１年半で今の睦月と知識量が同じぐらいに考えてます。この速さは主人公補正と言う事で。多分、あの世界で１０ヶ月あればこれぐらいの知識量はいくと思いますけどね。真面目にやれば。

問題の【脳開発研究所】についてはｗｉｋｉ&カードを見ずに答えられたら拍手を送ります。その知識量に谷川は脱帽します。

しかしこういった問題を作るのも楽しいものですね。意外な発見です。

答えが気になる方はメッセージボックスで送らせてもらいます。まぁｗｉｋｉみたら殆ど書いてるんですけどね。

それではこの辺で。さようなら。

第7話「アカデミア初登校」

●●●

「うん、似合ってるよ睦月」
編入試験を特待生というおまけつきでクリアした翌日。
俺は朝から部屋着ではなく、デュエルアカデミアの男子生徒の制服を着ていた。
「やはり慣れないな」
白のカッターシャツに、水色まではいかない薄い青色のスクールジャケット、濃い赤のネクタイ、黒のスラックス、そして高等部1年を示す赤いネクタイピン。
「龍可達は準備は終わったのか？」
「うん。私は大丈夫」
「俺も」
2人も今日は久し振り（俺は初めてだが）にデュエルアカデミアの制服を着ている。龍亞の服装は俺と一緒。龍可の女子制服も、俺達とほぼ同じようなジャケットで、ズボンではなくスカートになっているぐらいだ。
今日は3人全員でデュエルアカデミアに登校する。俺が編入試験に受かった後、龍可と龍亞の休学も降ろしたからだ。
昨日の編入試験の後、あの試験官の先生からこう言われた。
「一応これで編入完了だけど、もうすぐ長期休暇の時期に入るから

それが明けてから正式に編入される事になるから覚えておいてね。それまでの間は単位は取れないけど、アカデミアに来て授業を受ける事は許されているから、来るなら僕に電話を入れて。君のクラスは僕の担任するクラスだから」

本当なら長期休暇が明けてから行くつもりだったが、龍可と龍亞が早く一緒に行きたいと頼んできたので今日から行くことになった。龍亞と龍可もこの間の時期は成績がつかない。

「さて、それじゃあ行くか」

「「うん」」

二人には久しぶりの、俺は初めての登校だ。

俺達３人は時間に余裕を持つ為に早めに家を出た。

●●●

「初めまして、今日からこのクラスでお世話になる日森　睦月です。これからよろしくお願いします」

初めてのアカデミア教室。生徒人数はざっと見で４０近くか。結構クラスが多かったし、やはりこのアカデミアは大きいな。

少し男女比が６：４と、女生徒の方が多いな。

「彼は昨日、編入試験を受けて成績優秀の特待生でこのアカデミアに編入した。なんと彼は編入試験を満点でクリアしたんだぞ。その時の試験官が僕だったから間違いない」

感嘆の声に隣とのヒソヒソ話。

素直に信じた生徒が７割、怪しんでいるのが３割弱と言ったところか。因みに残りは寝てる＆興味なし。

「えっと、君の席は。……あー、彼女の隣だね。えっとまぁ、悪い子じゃないから、仲よくね？」
試験官の先生から新たに変わった担任の先生から、とある後ろの隅に近い席を指定された。
取り敢えず席に座る。隣の生徒は女生徒で、顔立ちの整ったいわゆる美少女だった。
「よろしく」
無視。どうやら俺に興味はないらしい。ずっと窓の外を眺めている。
まぁ無理に話す必要もないだろう。美人だが、こう愛想がないのではな。
俺は俺に興味を持たない人物にあまり興味は持てない。あまりに強烈な人物なら変わってくるが。
「新しく入った彼に負けないように、今日もしっかりと勉強に励む事。さて、今日のＨＲは早いけどこの辺でお終いにしようか。皆彼に聞きたい事、たくさんあるだろうしね。それじゃあ原さん。お願い」
「はい。起立、礼」

●●●

「おいおまえだろ！？　あのハイトマンを倒した編入生ってのは！」
「凄いです、一度私と決闘をしてください！」
「あ、ちょっと私が先にしたいのに！」
「何言ってんだよ！　俺だ俺！」
只今ＨＲ終了から１分半。
編入時の事が既に明るみに出てる模様だった。
「ちょっとそこ！　静かになさい！」

さっき号令をかけたこのクラスの委員長らしき人物が声を荒げているが、この騒ぎは収まらない。
さて、この騒ぎをどうしたらいいものか。
そんな事を考えていると、

ドンッ！

隣の女生徒がいきなり机を叩いた。
それにこの騒ぎの一団どころか、クラス全員が黙った。
「静かにしてくれないかしら」
まさに鶴の一声だった。
彼女のこの一言で、委員長らしき人物があれだけ声を荒げても収まらなかった騒ぎ連中が散り散りになった。
どうやら彼女はこのクラスにおいて大きな影響力を持っているようだ。
「ありがとうございます。どうしようかと思ってたところでしたから」
無視。
どうやら俺の事は徹底的に無視してくるぞこの女。
はぁ、と俺は一つため息を吐く。
まぁ転入性や編入生の初めは大方このようなものだろう。そう納得しておく。

キーンコーンカーンコーン

1時間目のスタートを告げる鐘が鳴る。
ちょうどいい。正直何をすればいいか分からなかった事だしな。
久しぶりに真面目に授業を受けるとするか。

――久し振り？

そうか、俺はあのペントハウスに落ちる前は学生だったんだよな。
すっかり忘れていた。
確かに、久し振りだな。
そうこうしている内に先生が入ってくる。最初の授業は国語か。
なら真面目に、受けさせてもらおう。
記憶はないが、久し振りの授業を。

●●●

時は飛んで昼休み。
しかしまぁ授業はそこそこ。分からなかったりでも分かったり。
結論、普通に受けれるレベルだった。
決闘の座学授業はもはや復習レベル。まだ試験問題の方が難しかった。
まだ高等部1年だ、これから難しくなっていくならそれはそれでありがたい。新たな知識を得られるのだから。そもそもアカデミア等はそういった場所だ。
兎にも角にも、無事やっていけそうな環境に安堵する。
友人関係についても問題はなさそうだ。
今は高等部の食堂。そこで俺はクラスメイト達＋噂の人物を見に来た野次馬に囲まれている。
なんでも俺の隣の席の女生徒の性であまり近づく事が出来なかったので、昼休みの今が好機と寄ってきたらしい。
「ねぇねぇ、私睦月君の決闘が見たい！」
「私も私も！」

「そうだ、俺と決闘しようぜ！」
「いや、ここは俺がいく！」
今は女子が俺の決闘を見たいと言って、男子は俺の強さを見たくて誰が闘うかを今じゃんけんで決めてる真っ最中だ。
暫くするとどうやらじゃんけんに勝った男子生徒が俺の前に出てくる。
「さぁ、俺と決闘だ！」
ちなみに、俺は一言も決闘すると言ってない。
「お前が勝ったら、この食堂の食事分、俺が代わりに払ってやる！」
……まぁそう言う事なら、やってもいいか。
「分かりました。先程の言葉、忘れないで下さいよ」
しかしそこまでして俺と決闘したいのか？　それとも自分が負けないと信じ込んでいるのか？
まぁいい。どちらにせよ、挑まれたら逃げないのが決闘者の誇り。
全力で、やらせてもらおう。

●●●

と、言う訳で先日試験を行った決闘会場に移動。
既にプレイヤーフィールドでＤ－ディスクを装着して対面している。
「準備はいいか？」
「いつでもどうぞ」
「なら――」
「「決闘―デュエル―！」」

睦月　　ＬＰ　４０００
男子生徒ＬＰ　４０００

そして火蓋は切って下ろされる。
「先攻は譲ってやるよ、編入生だしな」
「胸をお借りします。それでは、ドロー。俺は手札から、永続魔法【強者の苦痛】を発動。そしてさらに永続魔法【魔法族の結界】を発動。手札から【憑依装着―ウィン】を召喚してターンエンドです」
「【霊使い】のデッキか。そんなんで闘うつもりか？」
「確かに【霊使い】はファンデッキの要素が強いですが、そう悲観する事もないですよ。私としては、真剣に闘ってますから」
「そんなデッキでなんてなめられたもんだな。　俺のターン、ドロー。俺の場にモンスターが存在せず、相手のフィールドにモンスターが存在している場合、俺はこの【サイバー・ドラゴン】を手札から特殊召喚する」

サイバー・ドラゴン　光　☆５　機械族
攻撃力２１００／守備力１６００

サイドラか、あのカードはその召喚の行い易さから、どんなデッキにも採用率の高いモンスターカードだ。これでデッキの判断は難しいな。
「そしてサイバー・ドラゴンをリリースして、【邪帝ガイウス】をアドバンス召喚！」

邪帝ガイウス　闇　☆６　悪魔族
攻２４００／守１０００

ガイウスか、面倒なのが来たな。
「ガイウスの効果発動、俺は永続魔法【強者の苦痛】をゲームから

除外する！」
　ガイウスの両手から放たれた黒い塊によって、俺の魔法＆罠ゾーンの【強者の苦痛】が飲み込まれた。
「これで攻撃力は元のままだ。行くぞ！　ガイウスで【憑依装着―ウィン】を攻撃！」
「速効魔法発動、【ディメンション・マジック】！　私は【憑依装着―ウィン】をリリースして、手札の【憑依装着―エリア】を特殊召喚！　その後に、あなたの【邪帝ガイウス】を破壊する！」
　ガイウスは光の欠片になって破壊される。
「ちっ、まぁいい。苦痛は破壊した。俺は1枚伏せてターンエンドだ」
「私のターン、ドロー。俺は手札から、【氷結界の風水師】を召喚します」

氷結界の風水師　水　☆3　魔法使い族・チューナー
攻800／守1200

「☆4の【表紙装着―エリア】に、☆3の【氷結界の風水師】をチューニング。神秘なる力よりいでし魔術師よ、今ここにその全てを示せ！　シンクロ召喚！　現れろ、【アーカナイト・マジシャン】！」
　これでこのデッキの1体目のエースモンスターの登場だ。
　アーカナイトにあと【マジカル・コンダクター】がいれば尚良かったが、まぁ問題ないだろう。
「【アーカナイト・マジシャン】の効果発動。自身に魔力カウンターを2つ乗せ、そのカウンター×1000の攻撃力をアップします」

アーカナイト・マジシャン　魔力カウンター×2
アーカナイト・マジシャン　攻撃力400→2400

「アーカナイトで直接攻撃、【神秘魔導（アーカナイト・マジック）】！」
「調子に乗るなよ、罠発動【リビングデッドの呼び声】！　この効果で【邪帝ガイウス】を墓地から特殊召喚する！」
ちっ、面倒なカードを。
あのカードは墓地からモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚するカード。弱点として、リビングデッドが破壊されるか、特殊召喚は攻撃表示限定なので、その蘇生モンスターより攻撃力の高いモンスターで攻撃される可能性がある、と言ったところだ。
今のアーカナイトは攻撃力２４００。そしてガイウスも２４００の攻撃力。同士討ち狙い、あるいは攻撃を躊躇させる気か。
「さぁ、どうする？　俺としてはどちらでもいいぜ」
「私はモンスターの数が変動した事により、巻き戻しを行います。攻撃を取りやめ、メインフェイズ２へ移行。そして【アーカナイト・マジシャン】の効果発動。カウンターを１つ取り除いてリビングデッドを破壊します」

アーカナイト・マジシャン　魔力カウンター×１
アーカナイト・マジシャン　攻撃力２４００→１４００

「まぁ妥当な判断だな」
「ターンエンドです」
「俺のターン、ドロー。俺は手札から、【神獣王バルバロス】をリリースなしで召喚。この効果で召喚する場合、バルバロスの攻撃力は３０００から１９００になる」

神獣王バルバロス　地　☆８　獣戦士族
攻３０００／守１２００

神獣王バルバロス　攻撃力３０００→１９００

「そして攻撃力の下がった【アーカナイト・マジシャン】に攻撃！」

神獣王バルバロス　攻　１９００　１４００　攻　アーカナイト・マジシャン

睦月　ＬＰ４０００→３５００

「アーカナイトが破壊された時、【魔法族の結界】の効果が発動。カウンターを一つ乗せる」

魔法族の結界　魔力カウンター×１

「俺は１枚セットしてターンエンド」

「私のターン、ドロー。……１枚伏せてターンエンドです」

「俺のターン、ドロー。俺は手札から【クリッター】を召喚。２体で直接攻撃！」

クリッター　闇　☆３　悪魔族
攻１０００／守６００

睦月　ＬＰ３５００→６００

「１枚伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。……これなら、何とかなるか。私は手札から、【魔導戦士　ブレイカー】を召喚。ブレイカーの効果で自身に魔力カウンターが１つ乗ります」

魔導戦士　ブレイカー　魔力カウンター×１
魔導戦士　ブレイカー　攻撃力１６００→１９００

「さらにブレイカーのカウンターを取り除いて、あなたのデッキ側に伏せているセットカードを破壊します」

魔導戦士　ブレイカー　魔力カウンター×０
魔導戦士　ブレイカー　攻撃力１９００→１６００

「くそっ、【炸裂装甲（リアクティブアーマー）】が破壊されたか」
「そして【魔法族の結界】の効果発動。このカードとブレイカーをリリースして、このカードに乗っているカウンター分カードをドローします」
結界に乗っているカウンターは１つだけ。だが、ブレイカーが墓地に行けばそれでいい。
「そしてさらに通常魔法発動、【貪欲な壺】。これで墓地にいるモンスター５体をデッキに戻し、２枚のドローを行います」
俺が戻したのは、【憑依装着―ウィン】、【憑依装着―エリア】、【氷結界の風水師】、【アーカナイト・マジシャン】、【魔導戦士ブレイカー】のちょうど５体。
これを狙って結界をリリースしたんだ。
ドローしたカードは、――中々いいカードだ。
「私は１枚伏せてターンエンド」
「そこまで頑張って、結果として１枚しか伏せられねぇのかよ。拍子抜けだぜ」
「そうですか？　私はまだまだ諦めてませんよ？」
「ＬＰ６００の虫の息でよく言うぜ。俺のターン、ドロー。これで終わりだよ。バルバロス、決めちまえ！」
「あなたの言った１枚の伏せカードはこれだ、罠発動【聖なるバリアーミラーフォース―】！」
「なんだって！？」
「あなたの攻撃表示モンスターはすべて破壊させていただきます！」
「くそっ、だが【クリッター】の効果発動！　デッキから１５００

以下の攻撃力を持ったモンスター1体を手札に加える！　俺が加えるのは、【N・グラン・モール】だ！」
グラン・モールは攻撃時に自分とその攻撃対象モンスターをダメージ計算を行わずに双方を手札に戻すバウンス効果持ちのモンスターだ。
シンクロモンスターや召喚条件がめんどくさいモンスターを戻されると非常に厄介だ。
しかしあのデッキ、カードがバラバラ過ぎだ。もしかしたらこのデッキ……。
「俺はグラン・モールを守備表示で召喚。ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー。手札から、【マジカル・コンダクター】を召喚。そしてフィールド魔法発動、【魔法都市エンディミオン】！」
周りの風景が決闘会場から魔法都市の一角に変わる。周りはビルや魔法陣が浮いている機械がある。
「魔法が発動した事により、コンダクターに魔力カウンターが2つ乗ります。そしてさらに伏せカードオープン、【サイクロン】。あなたの伏せカードを破壊します」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×2

カードは、【次元幽閉】。
これで後はグラン・モールを何とかするだけだ。
「そしてまたコンダクターにカウンターが乗ります」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×4

「【マジカル・コンダクター】の効果発動。カウンターを3つ取り除いて、【氷結界の風水師】を手札から特殊召喚」

マジカル・コンダクター　魔力カウンター×1

「☆４【マジカル・コンダクター】に、☆３【氷結界の風水師】をチューニング！　神秘なる力よりいでし魔術師よ、今ここにその全てを示せ！　シンクロ召喚！　現れろ、【アーカナイト・マジシャン】！」

もう一度出て来い、俺のエースモンスター！

「アーカナイトの効果発動。【魔法都市エンディミオン】の魔力カウンターを１つ取り除いて、グラン・モールを破壊します！」

守備表示形式で薄青くなっていたグラン・モールが、アーカナイトの杖から発せられた波動によって破壊される。

これで相手はガラ空きだ。行かせてもらうぞ。

「今度こそ、【アーカナイト・マジシャン】で直接攻撃。【神秘魔導】！」

「くっ！」

男子生徒　ＬＰ４０００→１６００

「ターンエンド」

「俺のターン。ドロー。ちっ、俺は【魔導戦士　ブレイカー】を守備表示で召喚。カウンターを一つ乗せ、１枚伏せてターンエンド」

魔導戦士　ブレイカー　魔力カウンター×１
魔導戦士　ブレイカー　攻撃力１６００→１９００

「私のターン、ドロー。私は引いた手札から、【魔力掌握】を発動。【アーカナイト・マジシャン】に魔力カウンターを１つ上乗せして、さらに【魔法都市エンディミオン】の効果で、魔法が発動した時このカードにカウンターを１つ乗せます」

アーカナイト・マジシャン　魔力カウンター×３

アーカナイト・マジシャン　攻撃力２４００→３４００

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×１

「そしてデッキから、【魔力掌握】を１枚手札に加える。しかしこのカードは１ターンに１枚しか発動できない。そして【アーカイナイト・マジシャン】の効果で【魔法都市エンディミオン】の魔力カウンターを取り除いて、ブレイカーを破壊します」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×０

「これで終わりです。【アーカナイト・マジシャン】、ダイレクトアタック！　【神秘魔導】！」

「く、くそぉぉおお！」

男子生徒　ＬＰ１６００→０

睦月　ＬＰ６００

●●●

「いい決闘だった」

「はい。ありがとうございます。ところで、あなたのデッキは【ハイランダー】ですか？」

「おう、流石に分かるか。やりにくかっただろ」

「はい、それなりに」

最後に握手をして、この決闘は終わりを迎えた。

ふと観客席を見上げる。野次馬の女子がキャーキャー騒いでいる。

正直五月蝿い。
女三人寄れば姦しいと言うが、観客席にいるのはざっと見で１０数人。好意を持ってくれるのは嬉しいが、少し静かにしてくれないだろうか。
「睦月！」「睦月兄ちゃん！」
「ん？」
声のする方を見ると、龍亞と龍可がこちらに走ってきていた。
「どうしたんだ２人とも」
「睦月が闘うって噂を聞いたから、途中から見てたの。お疲れ様」
「さっすが睦月兄ちゃん、ねぇねぇ次俺としよ！」
既にＤ－ディスクを装着済みの龍亞。やはりまだ大きいのか、腕をあげるとずれていく。
その内Ｄ－ディスクを調整に出さないといけないな。
「あーもう、ちゃんとはまってろよ」
「この子達は、お前の知り合いか？」
「私の兄弟で、男の方が兄の龍亞、女の方が妹の龍可です」
さっき闘った男子生徒が問いかけてきたので、紹介する。
「初めまして、龍可です。お疲れ様でした」
「俺は、龍可の兄の龍亞。よろしく！」
まぁいつも通りの反応をする２人。こうみると対照的だな。
その後は休み時間いっぱいまで龍亞や他の人（女子多め）と決闘続きだった。
まぁ初日にしてはいい感じだと内心満足しながら、俺は順当に勝ち続けていった。

第7話「アカデミア初登校」（後書き）

こんにちは。谷川です。読了、ありがとうございます。

今回はあまりあとがきに書く事はないですね。
ただ一言、
遅くなりました。
以上です。
次回もよろしくお願いします。
それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5449p/

遊戯王　5D's　―魔女と魂の願い旅―

2011年9月26日17時00分発行